2017 年度

国際学研究科修士論文

神事・祭事の地域研究

―栃木県日光市の社寺文化―

Community studies of Shinto rituals and annual festivals.

- Culture of shrines and temples in Nikko, Tochigi -

宇都宮大学大学院国際学研究科

国際社会研究専攻

指導教官名 中村祐司

学籍番号 164107X

渡邉 裕介

要旨

近世日本で戦乱の無い平和な世の中を 260 年以上にわたって維持することができた江戸幕府。その幕府の初代将軍徳川家康公が祀られる日光東照宮は、日本において歴史的、文化的に特別な場所の一つであり、東照宮を含めた世界遺産「日光の社寺」には、現在も国内外から多数の観光客、参拝客が訪れている。中でも例大祭が行われる日は特に人出が多い。その祭りには、神官や巫女だけでなく、多数の市民が参加して祭りを支えている。彼らにとって、祭りとはどのようなものなのかを調査し、また、少子高齢化による人口減少が進むなか、今後、どのようにすれば祭りを継続していくことができるのかを考察していく。

本論文は 5 章で構成する。第 1 章では、筆者が実際に例大祭に参加した経験を踏まえ、日光東照宮春季例大祭の概要を紹介しつつ、研究の目的をまとめるとともに、祭りに関する先行研究を例示する。柳田国男から始まった民俗学研究では、日々の生活の中で「ハレ」と「ケ」を区別して、「ケ」には質素倹約を旨として生活し、「ハレ」の日に神に近づき、散在して喜びを分かち合うとされたが、現代では「日常のハレ化」が進み、ほとんどの人が小さな贅沢をいつでも享受できるような生活スタイルになっている。それと同じくして「祭りのイベント化」も進んでいき、「誰のための祭りなのか」という観点が変化するものもある。社寺のためなのか、参加する市民のためなのか、地域産業のためなのか、観光客のためなのか、それぞれ多面的にとらえる必要がでてくる。また、「祇園祭(京都)」の先行研究などから地縁組織と社縁組織では、年ごとの景気に左右されにくい地縁組織の方が、より強固で安定的な支持基盤を作りえることも導いている。

第 2 章では社寺を支える組織について述べていく。国宝を含めた歴史的建造物を守る組織もあれば、日光東照宮の「神輿奉舁会」や日光二荒山神社の「若衆制度」など、一定の祭のための組織もある。一方で、社寺と繋がりのある民間企業による支援組織も存在している。しかし、最も関わりが深く、定期的に会議などで顔を合わせているのが、各社寺の「世話人」と彼らの組織「世話人会」であることを紹介し、現地での聞き取り調査を経て、世話人の実態を探っている。負担も多いが、奉仕することそのものが「恩返し」であり、「誇り」であり「喜び」であると回答を得ている。

第 3 章では祭りの変化について探っていく。観光ガイドブックなどでは、毎年変化無く盛大に開催しているように紹介されるが、現地調査によって、人口減少の影響で中鉢石町が弥生祭の家体繰り出しを休んでおり、また、日光東照宮春季例大祭前の清掃の行事「栗石返し」も日程が変更になっていたことが分かった。神輿を担ぐための新たな団体も生まれている。それぞれの変化の背景を探っていく。

第 4 章では、祭に奉仕する市民たちの声を直接、聞き取り調査している。祭りへの意識が非常に高い方から、あまり高くない方までさまざまではあるが、特に日光地域で生まれ育った人は、子どものころに「子どもにしかできない役」で祭りに参加しており、「祭りと

ともに生きていく」というライフスタイルこそがベーシックなものであった。また、先行研究を参考に、祭と女性の関わりについても述べていく。日光の祭りの中では、女性差別や女性蔑視というような印象は無かったが、男女それぞれの役割で上手に住み分けができているようだった。

第 5 章では、数値データにも着目して日光の社寺を要する日光市の現状について見ていく。年々、人口減少が進み、高齢化率も高まる中、2006 年（平成 18 年）に旧日光市と今市市、藤原町、足尾町、栗山村の 5 つの自治体が合併し、新日光市が誕生した。この合併そのものも、特に旧日光市（日光地域）内での足並みがそろわず、約 3 年半の期間を要しているが、その根底に「日光の社寺と、その祭りを自分たちが支えてきた」という強いプライドもあったようである。また、実際に合併後に、どのような課題が出てきたか、などを調査している。

この研究を通して、筆者は「日光地域で生きること」という一つの芯が通った流れを感じた。子どもが祭りで着る着物も、かつて祖父が着て、父が着て、叔父が着ていたものを受けついでいたり、父の晴れ姿を見て、いずれ自分も千人武者行列に加わりたいとか、大神輿をかつぎたいと将来のビジョンを持つようになったりする。女性の目線からも、子どものころにお囃子や笛で参加し、大人になってからは夫や息子の晴れ姿に目を細めているようだ。日光での祭りは、地域住民にとって、まさしく「特別なハレ」であり、他の用事を差し置いても優先したい行事としてしっかりと根付いている。祭りは地域住民の「積極的なボランティア」によって支えられ、これが「人と人の精神的な結びつき」や「コミュニティの形成と強化」を通して「社寺と人の結びつき」を構成している。

一方で、深刻な少子高齢化が、祭りの継続性を脅かしている事実も否めない。そう遠くない将来に、祭りを支える人たちの数を増やすか、祭りの規模を縮小して開催する工夫のいずれかの選択が迫られる。筆者は以前「祭りの外側」にいた者でも「内側」に入れる取り組みを支持したい。具体的には日光地域にに居住していなくても、祭の趣旨に賛同して参加できる人に門戸を広げたり、これまで女性を入れてこなかった部分にも女性が入れるような仕組みになると考えられる。長い歴史を持つ祭になるほど、急な変革を好まない傾向は強いが、3 章で見るように、時代とともに変化を許容している部分もある。「誰のための祭りなのか」、という問いには、社寺、地域住民、地域産業、観光客、カメラマン、それらすべてのためのものであることが望ましい。行政のサポートも含め、さまざまな面での「内側と外側の垣根」を低くしていくことが、多くの人々に愛される祭りを盛大に継続していくために必要なこととなるだろう。

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.1
第1章．研究の目的と祭りの研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.4
1.研究の目的
2.祭りの研究
第2章．社寺を支える組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.12
1．社寺の建造物維持のための組織
2．世話人と世話人会
3．社寺別の奉仕組織
第3章．祭りの変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.19
１．日光東照宮の例大祭における変化
(1) 神輿奉舁会の発足
(2) 栗石返しの日程変更
2．日光二荒山神社の弥生祭における変化
(1) 儀礼の簡略化
(2) 家体の形体の変化
(3) 付祭りでの家体の減少
(4) 家体曳きへの観客の参加
第4章．奉仕する市民たちについての調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.27
1.供奉員についての調査
2.各町家体のお囃子についての調査
3.神事・祭事への女性の関わり方
第5章．環境の変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.35
1.日光市日光地域の変遷と現状
2.平成18年の市町村合併が与えた影響
おわりに—日光の祭りから日本の祭りの将来を見る—・・・・・・・・・・・・・P.40
参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.47
付属資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.48
あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.52

図・表一覧

図 1. 栃木県日光市における観光客入込数の推移・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 1
図 2. 東照宮産子会日光地区祭典世話人会の構成図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 14
図 3. 日光市と合併前の区域 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 35
図 4. 日光市全体と日光地域の人口推移 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 35

表 1. 代表的な日本の世界文化遺産の所在地と年間観光者数（2015 年） ・・・・・・・P. 3
表 2. 日光の社寺を支える組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 13
表 3. 日光の社寺における二社一寺の世話人会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 14
表 4. 自治会費の比較 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 16
表 5. 百物揃千人武者行列供奉員の調査結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 28
表 6. 家体ごとのお囃子の特徴 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 29
表 7. 年齢構成別地区別状況比較表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 36
表 8. 5 市町村合併のあゆみ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 38

写真 1. 日光二荒山神社弥生祭のにぎわい ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 2
写真 2. 百物揃千人武者行列 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 2
写真 3. 鎧武者姿の筆者 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 4
写真 4. 日光東照宮社務所前の宮仕・神人之碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 18
写真 5. 若衆の使者口上（弥生祭付け祭での儀礼の一つ)・・・・・・・・・・・・・・・P. 21
写真 6. 弥生祭での世話人と人夫ら ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 24
写真 7. 家体曳きに参加する観光客ら ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 25
写真 8. 安川町家体前のお囃子の子と若衆と世話人 ・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 30
写真 9. 稲荷町お囃子の練習風景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 31
写真 10. 弥生祭での花石町の金棒引き・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 42
写真 11. 弥生祭での安川町家体のお囃子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 42
写真 12. 輪王寺での世界遺産フェスティバル 1 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 44
写真 13. 輪王寺での世界遺産フェスティバル 2 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P. 44

はじめに

2015 年 5 月 17 日から 19 日にかけて、栃木県日光市にある日光東照宮では徳川家康公没後 400 年の節目となる「四百年式年春季例大祭」が行われた。式年大祭は 50 年に一度の大祭と位置付けられており、1 年を通して実施される。全国的に知られる善光寺の御開帳が 6 年に一度[1]、伊勢神宮の式年遷宮が 20 年に一度であるため、50 年に一度という機会の少なさは際立っており、参拝客が見られる機会も一生のなかで 1 度か 2 度となる。2015 年の式年大祭は新聞、テレビ、旅行雑誌などでも特に大きく取り上げられ、全国的に注目を集めた。日光東照宮の発表による 2015 年の年間参拝客数は前年比 24 万 4175 人増の 186 万 3672 人であり、東照宮と隣接する日光二荒山神社、日光山輪王寺にも参拝客増加の波及効果は見られている。

日光市全体の観光客入込数の年ごとの比較（図 1）でも観光客数の推移が見て取れる。なお、日光市には、日光湯元温泉や滝・渓谷の景勝地、紅葉スポット、ウインタースポーツ施設などがあるが、代表的な観光地は世界遺産「日光の社寺」となるため、日光市全体の

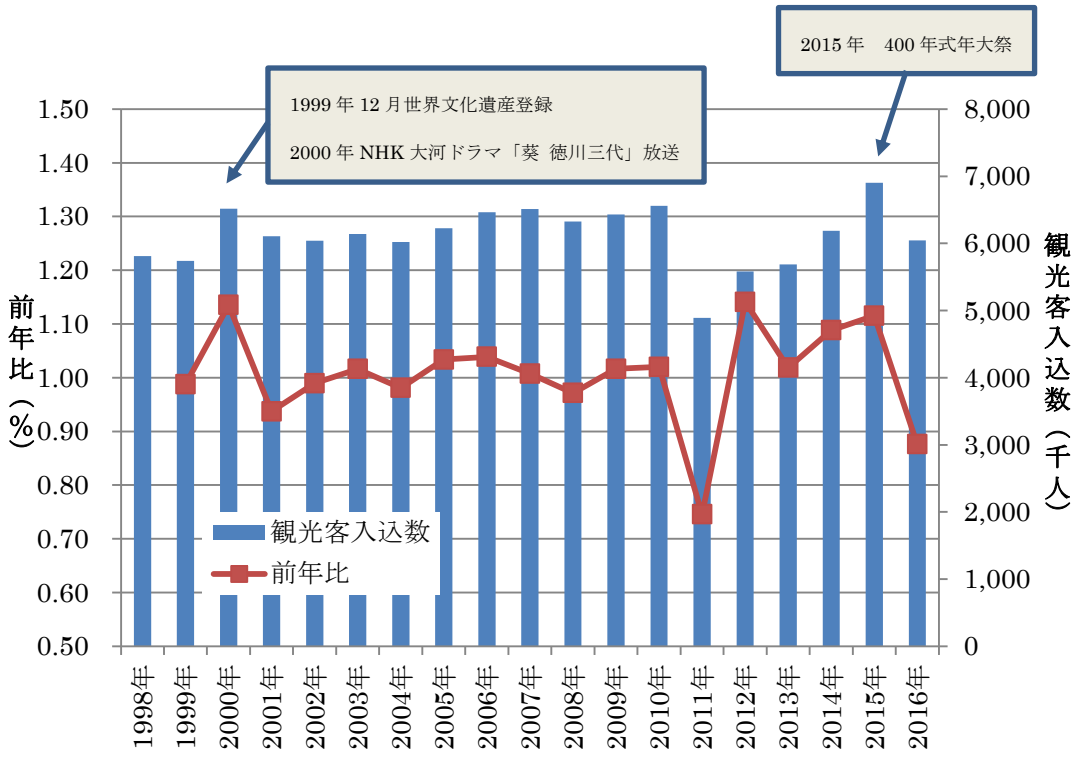

図 1　栃木県日光市における観光客入込数の推移

（栃木県商工労働観光部観光交流課による「栃木県観光客入込数・宿泊数推定調査結果」平成 15 年版、18 年版、22 年版、28 年版をもとに筆者が作成。市の合併があったため 2005 年までは日光市、2006 年以降は旧日光市のデータ。）

[1] 善光寺の御開帳は公式には「数え年で 7 年に一度」とされている。実際の年では、2003 年、2009 年、2015 年というように 6 年に一度の実施となる。

写真 1.日光二荒山神社弥生祭のにぎわい（2017 年 4 月 17 日 筆者撮影）

写真 2.百物揃千人武者行列（2017 年 5 月 18 日 筆者撮影）

観光客数は十分参考にできる数値と考える。1999 年 12 月 2 日に東照宮、二荒山神社、輪王寺の二社一寺が「世界遺産 日光の社寺」としてユネスコ世界文化遺産に登録され、翌年に NHK 大河ドラマで取り上げられたことも集客には大きな効果が見られるが、それ以降も安定して高水準を継続できている点も顕著である。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災による観光客の大幅減も、その後の 2〜3 年ほどで回復している。また 2016 年にはやや減少が見られるが、これは翌年の 2017 年に平成の大修理が一段落し、国宝の陽明門や三猿の彫刻が再度公開になるとの情報があったため、どうせ行くなら来年にしようと旅行の予定を先送りにする訪問控えがあったとも考えられる。

二社一寺では数々の神事・祭事が元日から大晦日まで 1 年を通して行われているが、特に日光三大祭りとして親しまれているものが、日光山輪王寺の「強飯式（4 月）」、日光二荒山神社の「弥生祭（4 月）」（写真 1）、日光東照宮の「春季例大祭（5 月）」である。これらは特に重要な祭りとして位置づけられ、祭りを目的に訪問する参拝客やカメラマンも多い。

表１：代表的な日本の世界文化遺産の所在地と年間観光者数（2015 年）

府県単位の観光者数（万人）	名称〔世界文化遺産登録年〕	主な所在地	所在地の人口（万人）	人口密度（人/㎢）
5684	古都京都の文化財〔1994 年登録〕	京都府京都市	147.6	1780
1497	古都奈良の文化財〔1998 年登録〕	奈良県奈良市	35.9	1290
1074	日光の社寺〔1999 年登録〕	栃木県日光市	8.4	56
733	厳島神社〔1996 年登録〕	広島県廿日市市	11.7	235
714	琉球王国のグスク及び関連遺産群〔2000 年登録〕	沖縄県那覇市	31.9	8070

（注：京都市観光調査年報平成 27 年度版、「那覇市の観光統計・観光客の声」平成 27 年度版、廿日市市産業振興ビジョン、奈良市報道資料「平成２７年 奈良市観光入込客数について」、平成 27 年 栃木県観光客入込数・宿泊数 推定調査結果より）

また旅行会社も祭の日程に合わせたツアー商品を展開している。事実、2015 年の春季例大祭のメインである百物揃千人武者行列（写真 2）には、約 5 万人が観覧に来ており、年間平均参拝客数（日光東照宮発表）から算出した 1 日当たり約 5100 人という数字と比較しても、いかに祭りの日に参拝客が集中しているかがうかがえる。それらの神事・式典は神社の神職らが執り行うものの、本祭に併せて行われる「付祭り（ツケマツリ）」は地域の市民たち多数が主体となっており、その数は日光東照宮の春季例大祭で 1000 人を超える。参加する市民らの中心に補佐役・調整役として百数十名の「世話人」が存在する。「世話人」は地域の自治会長などを兼務していることが多く、各町内を束ねる世話人無くして付祭りは催行できないと言える。

一方で、日本におけるユネスコ世界文化遺産で、年間を通してさまざまな神事や祭事を行っている他の地域と日光市を比較すると（表 1）、京都市や奈良市などの「都市」とは大きく状況が頃なり、日光市は人口が少ない「郊外市」でありながら世界文化遺産を有している特異なマチであることが顕著である。本論文の第 5 章で触れるが、日光市でも全国的な高齢化と少子化の流れは止められないものであり、これらが付祭りの主体に直接つながってくるため、祭りの継続について検討すると、将来の展望に大きな不安も抱えている。

第１章．研究の目的と祭りの研究

1. 研究の目的

2012 年 5 月 18 日、筆者は世界遺産東照宮春季例大祭、2 日目のハイライト「百物揃千人武者行列」の真っただ中にいた（写真 3)。1616 年に徳川家康公が亡くなり、神格化されて久能山東照宮に祀られた 1 年後（1617 年）に、家康公の遺言通り、久能山東照宮から日光東照宮に御霊が移された時の様子を再現したもので、千人武者行列の名前の通り、行列をなす人は 1000 人以上、馬も 10 頭以上が参加する。東照宮の神官らとともに参加する市民には、鎧武者、槍持ち、弓持ち、掛け面、子供猿など 44 種の役回りがあり、1 名のみの役もあれば、50 名程度で担ぐ大神輿も 3 基ある。例大祭は秋にもあるが、こちらは 600 人程度で、大神輿も 1 基になるなどひとまわり規模が小さいが、いずれも決められた衣装、決められた数、かつ決められた順番で往路と復路を歩く。どの役も重要なものだが、ひときわ華やかで人気があるのが鎧武者である。重厚な鎧に、腰には刀を帯び、金色の兜が、歩くたびに陽の光を反射させてキラキラ輝く。

参加者については、東照宮お膝元のマチごとに「このマチではどの役に何人が参加する」と割り振りがあるため、参加したい者が誰でも参加できるものではないのだが、筆者はこの年、旧日光市在住の友人から興味があるならやってみないかと誘われて、この花形の鎧をまとい、5 万人ともいわれる観光客の視線を浴びながら、背筋を伸ばして往復の行程を歩いた。会場となる参道沿いには大型のスピーカーも設けられ、女性アナウンサーが行列の先頭から順にそれぞれの役の名前と謂れを紹介していく。行列の両サイドから、大小無数のカメラで写真を撮られる。この行列の見物を旅の目的として来られた方が多いのだろう。外国人観光客は、カメラよりも一回り大きいタブレット端末を掲げて写真を撮る姿も目立った。直後に母国の家族や友人に向けてＳＮＳや電子メールで発信するのかもしれない。

写真 3.鎧武者姿の筆者（2012 年 5 月 18 日 撮影）

東照宮西側の日光二荒山神社境内から坂道を約 400m降りた御旅所（オタビショ）までが往路、その反対が復路となる。往復ともに数々の観光客が笑顔でこちら側の華やかな時代絵巻を見守っていた。まるで映画俳優にでもなったかのような誇らしさと緊張感を持ちながら鎧武者の役を演じていた筆者だが、ひとつの違和感があった。同じ鎧武者集団にいた参加者で、10 代の高校生男子が、どうも凛々しさのかけらもない、気だるい雰囲気で歩いていたのだ。もともとやる気がないのか、寝不足なのか、体調不良なのかはわからないが、つまらなそうな様子は、祭りを楽しみに日光を訪れた観光客にとっては残念な思い出になってしまう。「たくさんの人が楽しみに見に来ているんだから、しっかりとやってくれよ」と声をかけたかったが、その高校生とは離れた場所にいたので、その機会も無く、また行列に帯同していた世話人の方々からもとくに助言や指導は無かった。もちろん余程のことで無い限りは声をかけたりしにくい雰囲気でもある。参加にあたって、着用の仕方がわからない衣装の着付けをサポートしてくれたのも世話人の方だった。事前のレクチャーでは、「衣装の下に、Ｙシャツなどの襟付きのシャツは着ない」「腕時計は付けない」「私語はつつしむ」が主な注意点であった。

千人武者は大規模な 5 月の春の例大祭と、やや規模の小さい 11 月の秋の例大祭の両方で行われるので毎回のように参加している人もいれば、筆者のように初めて参加する人もいる。最近、規模の大きなスポーツ大会でのボランティア活動では 1 時間から 2 時間程度の事前講習会なども行われているが、この例大祭では、世話人らの会議のみで、参加者全員に向けての事前レクチャーは無い。「各町の世話人がその町からの参加者に指導していてあたりまえであり、参加者も一通り知っていてあたりまえである」という意識があるのかもしれない。

本研究では現在、「外から見られる観光資源」としてもとらえられる祭りを、世話人や神事・祭事への奉仕者という「内側からの目線」を通して調査し、市民の祭への意識や生活との関連性を研究する。また、祭の変化、伝統の変化とあわせて、平成の大合併によって変化したマチの現状を分析することで、今後も祭りを継続させていく上での課題を導き出したい。文献資料や国勢調査データ、対象エリアでの聞き取り調査とともに実際に筆者も祭に奉仕者として参加することで、地域に根差した実態を調査する。

2. 祭りの研究

日本における民俗学研究は柳田国男から始まるとされる。鳥越皓之[2]（1989）も多くの民俗学研究者が日曜学者[3]であった中で、「学問としての民俗学の研究は唯一柳田国男という人物によってになわれていたといっても過言ではないであろう。これが言いすぎだとすれば、柳田国男を中心とした東京のごく少数の人びとによってになわれていたといいかえてもよい。民俗学理論とか民俗学方法論といっても、すべて柳田国男個人の研究に委ねられてい

[2] 鳥越皓之編（1989）『民俗学を学ぶ人のために』世界思想社 p.26「柳田国男の方法論」
[3] 他に職業を持っている人が日曜や休暇を利用して調査を行う表現で、趣味の域を出ないことも多い。

たし、後には柳田の指導を受けた直門の弟子たちが考えることであった。それが少なくとも第二次世界大戦以前の民俗学の状況であった。」としている。柳田は日本各地に足を運び、日本人の死生観や宗教観から、昔話、民謡などの生活に密着したものまで幅広く調査、研究、比較を行っている。なお、その調査対象は山村、農村、漁村であった点も特徴である。鳥越（1989）[4]は、1930 年代に入って確立した柳田国男の民俗学について「日本社会、日本文化を均一な一つのものと把握し、したがって日本はどこであっても同じ歴史の歩みをすると考えた。その結果が地域差は時間差という認識になり、その認識にもとづく方法をつくりあげることとなった。今日の民俗学も基本的にはそのような方法を継承しているといえよう」とまとめている。もちろん、柳田らによって祭りを含めた地域の伝統行事についても、調査が行われており、1941 年に東京大学で行われた祭りに関する講義をまとめた「日本の祭」[5]は、祭の原初の形態を神祭りに求め、都市の祭礼へと変化していった跡をたどった、日本民俗学の古典的資料のひとつである。

柳田は「日本の祭り」の中でマツルと同義のマツラウという言葉についてこのように解説している。

今でいうならば「御側にいる」である。奉仕といっても良いかも知らぬが、もっと具体的に言えば御様子を伺い、何でも仰せごとがあれば皆承り、思召（おぼしめし）のままに勤仕（ごんし）しようという態度に他ならぬ。ただ遠くから敬意を表するというだけではないのであった。（柳田,1978,pp41-42）

祭りは古くから日本人にとって日常とは異なる特別な「ハレ」の存在であり、かつ、そのハレを演出するものと享受するものはおおむね重複していた。主催者と参加者たちが一堂に会し、共飲共食し、贈り物を交換するなどの行為でイエやシンルイ、ムラといった集団の区別が鮮明にもなった。小松（1997）[6]は「祭とイベント」の総論で下記のようにまとめている。

ハレは農民など常民の日常の生活（ケの生活）に対して、特別な日の特別な着物や食べ物、作法や行為、気分や意識などを意味する。正月や祭り、成人式や結婚式などがハレであり、消費や浪費も許された。日常の日々（ケの生活）はハレの日に備えて倹約を旨とする質素な生活の繰り返しであった。（小松,1997,p6）

また、松平（1981）[7]も同様に、マチの守護神の神社大祭神事を、年に一度のまた最大の

4　鳥越皓之編（1989）『民俗学を学ぶ人のために』世界思想社 pp.27-28「柳田国男の方法論」

5　柳田國男（1978）『新柳田國男集　第五巻』筑摩文庫

6　小松和彦（1997）『現代の世相５　祭とイベント』（総論・神なき時代の祝祭空間）　小学館

7　松平誠（1981）『祭の社会学』 講談社

レジャーと結束の場としても捉えている。

一年の苦しい稼ぎを一挙に吹きとばすすさまじいばかりの民衆エネルギーの爆発であった。年に一度の無礼講のなかで、マチはひとつになって遊び狂い、踊りまくった。人々はこの日のために祭礼金を積み、それを使い果たして、一緒になって町々を練り歩いた。(松平,1981)

神様のいる祭りについては、阿南（1997）[8]が手順や主体についてまとめているとおり、宗教行事として行われる祭りは、神様（や仏様）が主役である。「人びとが神様を迎え、もてなす行事」というのが、宗教者にとっての祭りの意味づけになる。

神社の祭りのおおよその手順（阿南,1997）
（1）本殿に神職や役員など関係者が集まり、厳粛な雰囲気のなかでまずはお祓いをし、次に神様をお迎えする。
（2）神職がお供えをし、祝詞を奏上する。その後は参列者が順番に玉串を捧げる。
（3）神輿が出る祭りでは、この後で神様を神輿に移す。そして神様を乗せた神輿が、さまざまなお供を従えて地域を回る「渡御」に繰り出していく。
（4）渡御が終わると、神様はまた神社に戻る。

これを地域の側から見ると、町内会などの地縁組織を単位として人と金が集まり、山車や神輿や太鼓や獅子舞を出す、「神様のことだから」という理由で、人びとは仕事を休み、寄付を出して義務を果たす。(阿南,1997)

このように神社の祭りは、参加できるのが地域に基づく信者組織の「氏子」に限定されることが多く、氏子にとって、祭りへの参加は権利であると同時に義務という位置づけにもなる。大規模な祭りであればあるほど、大勢の観客の前で自分たちだけが特権的に注目を集め、優越感に浸ることもできるが、逆に祭りを毎年続けていかねばならない義務を負っている。しかしながら、人口減少や資金不足など、地域社会の変容により、祭りの継続が困難になることも当然ながら生じてきている。

一方で、少々の無理をしてでも祭りを継続しようという意識は高いようである。祭に参加する理由について、米山（1974）[9]は京都の祇園祭の調査研究を通して、このように論じている。

自分たちが出なければ、この祭は動かないーという考えを、この祭に関わるほとんど

[8] 阿南透（1997)『現代の世相５　祭とイベント』　伝統的祭りの変貌と新たな祭りの創造　小学館
[9] 米山俊直（1974)『祇園祭　都市人類学ことはじめ』中央公論社

の人がもっている。（米山,1974,p192）

これはいわば、自発的、主体的な参加意識、とでもいうべきものだろう。積極的なボランティアの精神である。それが、多様な参加者をつなぎ、祭りを実現させるのである。（米山,1974,p193）

また、祭に参加する理由として米山は、「祭が人々にとって、社会的に許された大きい遊びの機会である」と位置付けたうえで、

この人たちを祭にかりたてているのは、この大きいしつらえられた遊びの場の与える生きがいではないだろうか。そして、その人たちのリードで、何十万人もの見物人たちもまた、祭見物の喜びをわかちあうのである。（米山,1974,p195）

としている。自発的、主体的なとらえ方をしており、そこに遊びと喜びが加わることで、さらに積極的に祭りに取り組むことになり、出費についても寛容になるのであろう。

また、祭りの主体については、米山（1979）[10]によって、京都の祇園祭と大阪の天神祭の比較が行われている。2 つの祭りは、いずれも貴族や武家の祭礼ではなく、町衆や商人らによる氏子組織が祭りを支えている。祇園祭は「氏子組織が地縁的な町組」を基盤に持っているが、天神祭は全体としては「講社組織（社縁）」を基盤にしている。祇園祭は、地縁原理の延長線上にある地方自治体が実質的に保護する働きを持つが、天神祭は支えている組織が大阪商工会議所を中心とした社縁団体であるため、その年の景気が祭りの開催可否や、開催規模に大きな影響を与える。この基盤の差は「祭礼の持続性」に反映し、祇園祭は戦争による中断などはあっても、盛んに継続できているが、天神祭は 1974 年に不況と石油ショックの影響で財政難となり、船渡御中止にもなった。地縁より社縁のほうが、まとまりやすく、またこわれやすい一面を備えている。なお、第 2 章で述べるが、世界遺産「日光の社寺」の祭りは地縁組織と社縁組織がともに支える、より強固な主体となっている。

江戸中期に形をなし、文化・文政に至って、一応の完成をみせ、明治以降にひきつがれてきた神社大祭神事だったが、戦後の高度経済成長は祭りの状況を大きく変えていく。地方から都市への人々の大量流出が地方のムラの過疎化を加速させ、祭りの担い手や後継者が不足する。そうなれば、地方では祭りを維持できず、簡略化したり停止したりすることに繋がっていく。小松（1997）によれば、「都市の大量消費社会の波が『生業を基礎とした共同体意識の強化・確認の場としての祭りの機能』『娯楽としての祭りの機能』を低下させた」としている。ほとんどの人が外食やプレゼントといった、ちょっとした贅沢をいつでも享受できるようになり、「ハレ」が日常化していったのである。柳田が調査対象とした第二次世界大戦前後の農村部、山村部の「ムラ」の生活と、現代社会の一般生活が環境の面

[10] 米山俊直（1979）『天神祭～大阪の祭礼』中央公論社

で大きく異なっていることは言うまでもないが、精神性でも大きな違いがある。小松（1997）は、戦後における人びとの「ハレ」の変化と日常化についても述べている。

日常の生活において節約された金銭は、（祭りのためではなく）日常の生活のハレ化を促進するために消費され、消費の場としての祭りの機能も相対的に低下していった。祭りを支えていた諸要素・諸機能が分離・解体していった。日常生活の都市化（ハレ化）の浸透は、祭りの世俗化（ケ化）を促進し、ハレとケの対立が溶解していったのである。（小松,1997）

結婚式を例にとってみても、かつては参列者たちの間の人間関係の構築や確認であったが、現在にそこまでの重要性は薄れつつあり、結婚の報告のみで結婚式を行わない夫婦も出てきている。また、ハレの場は消費の場でもあるのだが、新たな年中行事が市場の開発の論理にそって生み出されてきている。クリスマスやバレンタインデーなども、キリスト教と縁もゆかりもない企業がキリスト教徒でもない消費者に、キリスト教にまつわる伝説から抽出された「特別な情報」が付加された商品を「特別な日」に販売する。これが成功して定着して年中行事となる。近年では 10 月 31 日の「ハロウィン」が特別な日に数えられるようになり、若者を中心に仮装パレードや仮装パーティをするイベントになっている。「ハロウィン」も、もともとは古代ケルト人の民俗習慣としての収穫祭だが、日本の大規模テーマパークが秋の企画をきっかけに一般化した。一般社団法人日本記念日協会の試算によると、2016 年（平成 28 年）のハロウィン収穫祭の経済効果は、1,345 億円にまで成長しており、1970 年代後半に定着し、約 40 年の歴史を持つバレンタインデー（経済効果約 1300 億円）と並ぶほどに成長している。ただ、過去をたどれば、節句などの日本の伝統的な年中行事の多くも、中国から伝わり、私たちの先祖が根付かせたものであるため、近年になって作り出された行事を安易に軽視することはできない。

「祭り」と「イベント」とは、神の祭祀の有無、すなわちそこに神がいるかどうかという点で異なる。祭りでは、神とその信者との関係を確認・強化し、合わせて信者集団の結束も強化する目的が最重要であるため、経済的効果については期待していない。その一方で、イベントの主催者が意識するのは、「神」ではなく「客」であり、目的も経済的効果と集客になる。イベントは、かつては神に奉納するために特別な供物や芸能であったものが、やがて祭祀集団の域を越えて参拝してくる人々に、金品をとって提供する芸能・見せ物に変化したものなのである。そして、そのイベント自体にも環境の変化が起こっており、従来、集客が見込まれる都市の盛り場を中心に催されてきたが、最近では、都市に限定されず、自治体や商工会、観光協会などによって企画された、地域の活性化（＝地域おこし）を根底に持つものである。これらには神事はないものの、地域に伝わる伝承や、地域の花などが住民の「意識の依り代」として掲げ、イベントの名称に「〇〇祭り」などの言葉が

用いられている。代表的な〇〇祭りは桜まつりやアジサイまつり、ふれあい祭りなどで、季節に合わせて全国各地で行われている。

祭りとイベントでは「ハレがどこにあるか」も異なってくる。祭りは祭祀集団がハレの気分を享受できるが、地域おこしなどのイベントは、観客であり、よそから集まってくる観光客がハレの気分を感じる。イベントの主催者は経済的活性化のために裏方に徹することになる。そして時代とともに、旧来の祭りも、資本主義の商品になるかどうかという選択を迫られ、それに応じた対応、変容をせざるをえなくなっている。それは地域の人びとのためのハレであった祭りが、都市の住民に提供される「ハレ商品」の一つに変容することを意味している。

小松（1997）は「祭りのイベント化」について、祭りが生き延びる手段のひとつであると論じている。

祭りの主催者による祭りでの富の消費はそれ以上の富を生み出す投資であり、本来の祭りに見られたような消費の担い手は外部から訪れる観光客に転嫁されてしまったのだ。都市の大きな祭りも地域の小さな祭りも神事から芸能・見せ物へと変貌することで生き延びようとしているのである。（小松,1997,pp36-37）

地域をまとめあげ、経済の活性化をうながそうとする観点でいえば、大昔からの「祭り」であろうと、行政や住民が新たに作り出した「祭り・イベント」であろうと、根底は同じものになる。人びとがそれに馴染んでいるかどうかという点が長期の継続につながり、新しい「祭り」は、人びとに支持され愛されるようになる伝統を創り出せるかが課題となる。そして、その鍵は「観客」と位置付けることができる。

また祭りの形態は、明治新政府による神仏判然令（神仏分離令）や、昭和期の 2 度にわたる大戦の影響を受けて変化しているものも少なくないが、この 30 年～40 年の地方の過疎化、人口減少も各地域で大きな影響を与え続けている。

祭りを研究していくうえで、「伝統」という言葉も散見される言葉である。広辞苑[11]によれば伝統とは「ある民族や社会・団体が長い歴史を通じて培い、伝えてきた信仰・風習・制度・思想・学問・芸術など。とくにそれらの中心をなす精神的あり方」と記されている。川田順造（1993）[12]も「文化の世界化と同時に個人化が進む現代以降の時代、すなわち動態的な拮抗過程にある文化では、伝承されるもの、基層的なものは、絶えず変化し続けてきたのであり、文化が個人の集合で生きられている限り、消滅することはない」としている。

また、岡本太郎[13]（1973）は「伝統とは何か。それを問うことは己の存在の根源を掘りおこし、つかみとる作業です。とかく人は伝統を過去のものとして懐しみ、味わうことで終

---

11 『広辞苑』第六版（2008）　岩波書店

12 川田順造「なぜわれわれは『伝承』を問題にするのか」p21（『日本民俗学』193 号,1993）日本民俗学会

13 岡本太郎（1973）『日本の伝統』講談社

ってしまいます。私はそれには大反対です。‥‥自分の全存在で挑み、新しくひらくものです。‥‥そのようにして瞬間々々に創られていく過去だけが、生きて、伝統になるのだと私は思っています。」と述べている。祭りは親から子へ、子から孫へと伝えられる「しきたり」である一方、時代とともに変化しうるものでもある。祭りの研究を進めていく中で、「伝統」という言葉にとらわれすぎず、些細でも変化の有無を調査するとともに、変化があった場合、どのような背景があり、何が影響を与えたかを探ることが重要である。

柳田は「日本の祭」の文中で「祭り」と「祭礼」とを区別して使っており、見物、つまり第三者や傍観者のある祭りは「祭礼」だとしている。その区分に準ずると、本論文で取り上げていく祭りは「祭礼」を中心としたものであり、一般的には本祭とあわせて執り行われる「付祭り（ツケマツリ）」に焦点をあてることになる。

以上のように本章では筆者が実際に例大祭に参加した経験から、日光東照宮の春季例大祭の概要を紹介しつつ、研究の目的をまとめるとともに、祭りに関する先行研究を例示した。柳田國男から始まった民俗学研究では、日々の生活の中で「ハレ」と「ケ」を区別して、「ケ」には質素倹約を旨として生活し、「ハレ」の日に神に近づき、散財して喜びを分かち合うとされたが、現代では「日常のハレ化」が進み、ほとんどの人が小さな贅沢はいつでも享受できるような生活スタイルになっている。それと同じくして「祭りのイベント化」も進んでいき、誰のための祭りなのかという観点も生まれてくる。それが社寺のためなのか、参加する市民のためなのか、地域のためなのか、観光客のためなのか、それぞれ多面的にとらえる必要がでてくるようになる。また、地縁組織と社縁組織では、年ごとの景気に左右されにくい地縁組織の方が、より強固で安定的な支持基盤を作りえることも導いている。

第 2 章. 社寺を支える組織

1. 社寺の建造物維持のための組織

世界遺産「日光の社寺」を支える組織は分野ごとに多岐にわたり、地縁組織、社縁組織が混在するとともに、過去には幕府の庇護という体制下にもあった。

社寺の建造物維持のための組織について歴史あるものから注目すると、「保晃会（ホコウカイ）」の存在がある。江戸時代には社寺は幕府の庇護のもと、300 年近くにわたり守られてきたが、明治維新によってその環境は大きく変わり、保護保全の費用捻出が重要課題となる。現代の「平成の大修理」を例に見ても、陽明門の改修のみで 10 億円程度の予算が必要となるため、社寺のみでの莫大な予算の確保は難しくなった。そこで 1875 年（明治 8 年）に、社寺の保存のために組織された民間団体が「保晃会」である。社寺関係者や市民、また、徳川将軍の重臣らの子孫によって組織され、1916 年（大正 5 年）までの 38 年間存在した。その後、1970 年（昭和 45 年）に保護の為の財団法人が組織され、2013 年（平成 25 年）以降は、公益財団法人日光社寺文化財保存会として活動しているが「保晃会」の意志は継がれている。その経緯は保存会が設立された際の設立申請書にも書かれている。

〔公益財団法人日光社寺保存会　財団法人設立申請書　趣意書より抜粋〕[14]

世界的文化遺産である日光二社一寺、即ち二荒山神社、東照宮並びに輪王寺の殿堂五十数棟は明治維新後、各社寺が専らその荘厳輪奐の美を維持して来た。

明治八年には社寺長職を中心として全国的な規模のもとに保晃会が組織され、大正五年解散するまで、三十八年間よく社寺修繕に協賛した。

然るに世界第二次大戦の前後は殿堂ようやくその光彩を失い、あまつさえ昭和二十四年十二月、今市大震災により、社寺殿堂境内は甚だしい災害を受けた。その際、社寺長職は、修繕と修復をはかり、昭和二十五年五月、日光二社一寺保存委員会を設立、文化財保護法の施行のもとに、国庫補助を受け大修繕を施行することとなった。

委員会は、工事執行のため、日光二社一寺国宝建造物修理事務所を設置し、修理に当たることとした。この間、修理とともに、殿堂防災工事も国庫補助を受けて施工した。

本修理工事は、昭和二十五年以降年次計画により施工され、昭和四十二年度第一期工事を完了し、神橋大修理を始め山内社寺殿堂は面目を一新、俗に昭和の大修理と称えられることとなった。

引続き昭和四十三年以降も更に未修理の分に対し、第二期第一次七ヶ年計画で修理工事を継続実施中である。昭和四十三年より既に修理を完了した殿堂の維持保全を目的として、本会事務所に維持工事部門を設置して、毎年社寺の経費を投入して補修に努めることと成った。

[14] 公益財団法人 日光社寺文化財保存会ホームページより「財団設立の趣旨」
http://www.nikko-bunkazai.or.jp/

昭和四十四年三月、本会の組織を更に強化し、日光二社一寺文化財保存事務所の制度を整備充実して、よりよい修理施行を期した。

ここに本委員会は、本会を発展的に改組して財団法人を設立し、日光社寺の国宝及び常用文化財指定の建造物の保存修理及び調査研究を行い、あわせて日光社寺の指定建造物等の防災設備を整備し、日光社寺の貴重な文化財の保護管理の萬全をはかり、我国文化の向上に寄与貢献を期するものである。

2. 世話人と世話人会

二社一寺の神事・祭事を支える組織は、利害関係を目的とせずに奉仕する自治会を単位とした各社寺の「世話人会」、社寺と直接的な利害関係のある事業者による組織など、多岐にわたっており、それぞれに構成員が異なる。(表 2)

世話人会は地縁組織であり、地域住民の中から選出された「世話人」が祭事神事における実務と調整役を担う。日光の社寺における行事を支える地域住民の組織は、現在「日光東照宮産子会日光地区祭典世話人会」、「日光二荒山神社氏子会世話人会」、「日光山輪王寺信徒会世話人会」の３つが存在し、規模や構成員がそれぞれ異なる（表 3)。なお、世話人は各町の自治会長と祭儀委員が担当することが通例で、また、自治会長でない場合でも「社寺の御用商人」となっている老舗店舗の主人が加わることが多い。これは祭事のとき以外にも社寺と市民の交流ネットワークがあるためで、信頼関係の構築とも密接である。ひとりの市民が２つ、もしくは３つの世話人会を兼任することも多い。

なお、東照宮産子会世話人は例大祭の本祭の前後に、東照宮の神職とともに東照宮の西側に位置する青龍神社への「御直会（オナオライ)」を行う。これは天候をつかさどるとされる青龍神社へ晴天を祈願する奉告祭にあたり、地域市民の奉仕者を代表して担当することになる。なお、青龍神社は小さな神社で、普段から参拝客や観光客の姿は無く、「御直会」

表 2. 日光の社寺を支える組織

社寺との関係性	日光東照宮	日光二荒山神社	日光山輪王寺
利害関係無し。周辺地域との繋がりが強い。	産子会世話人会	氏子会世話人会	信徒会世話人会
利害関係無し。周辺地域との繋がりが弱い。	神徳会、徳川宗家	―	―
利害関係無し。神事・祭事・法事関係のみ	「例大祭」における神輿奉舁会	「弥生祭」における若衆制度、中老会	―
直接的な利害関係有り	葵会	巴会	光輪会

（注：2016 年 9 月、東照宮、二荒山神社、輪王寺への聞き取り調査をもとに筆者作成）

表 3. 日光の社寺における二社一寺の世話人会

区分	関連社寺	世話人数	対象町数
日光東照宮産子会日光地区祭典世話人会（氏子に相当）	日光東照宮	100 名以上	日光地域全域
日光二荒山神社氏子会世話人会（氏子に相当）	日光二荒山神社	120 名程度	日光地域全域
日光山輪王寺信徒会世話人会（檀家に相当）	日光山輪王寺	125 名	日光地域全域（30 町）

（注：2017 年 8 月三ツ山氏、真杉氏への聞き取りに基づき作成）

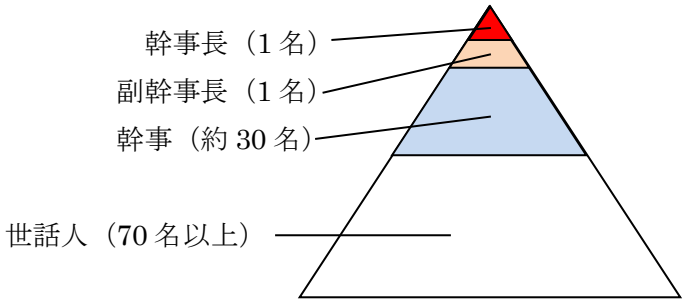

図 2. 東照宮産子会日光地区祭典世話人会の構成図

（注：2017 年 8 月三ツ山氏、真杉氏への聞き取りに基づき作成）

も事前に日時を公表するものでもないために見に来る観光客がいないばかりか、地域外の人には「御直会」の存在すら知られていない。

高齢となり、体力面や健康面で継続が難しいことを理由として世話人を交代する場合もあるが、これは世襲ではなく、次の世話人は自治会組織内で選考される。そのため、基本的に親から子へという継続は無いが、仮に父親が世話人だったとして、10 年～20 年経ってから、その息子が世話人になることは有りえる。一方で、平日の昼間にも奉仕や会合が行われる影響で、一般的なサラリーマンでは参加の調整が難しく、自営業の者や、仕事を引退した者が望ましいと考えられていることもある。そのため、世話人を担当できる家自体も減少傾向にある。

ここで、世話人会の組織構成について、東照宮産子会日光地区祭典世話人会を例に見ていく。日光地域内の各町（人口の少ないところでは複数町の連合体）を対象に、世話人の割り当てが規定されており、人数は各町から 3 名～6 名。これは自治会での会議を通して、任命される。各町での世話人が決まると、その中から代表となる幹事 1 名が選ばれ、幹事らの会議である幹事会に参加する。幹事会の選挙で、約 30 名の中から幹事長と副幹事長が選出されるピラミッド型である（図 2）。幹事長の任期は 1 期 2 年で、複数期の継続もある。

なお、現在まで世話人を構成するのは、50 代～80 代の成人男性であり、女性は一人も入ったことがない。

一年を通して、世話人の担当する仕事は少なくない。「日光の社寺」では年始から年末まで、神事・祭事は数多くあり、しかも曜日にかかわらず、催行の日付が決まっているものが非常に多い。それぞれに事前の会議や準備もある。ましてや 3 つの社寺のうち、2 つや 3 つを重複して担当している世話人は、それぞれの本業と両立するのは時間的にも精神的にも苦労が大きいようである。

筆者は「世話人は負担であるか？」という観点で、世話人 3 人に聞き取り調査を行い、心象を探った。（2016 年 9 月の世話人への聞き取りを実施。それぞれ自治会長も兼任されている方である。）その回答を下記にまとめる。

肯定的な受け止め　〔恩返し、誇り、楽しい〕

●祭りの日程が決定しているため、世話人自身が家業を休んで参加することも多いが、1 年の中で数日は社寺に奉仕して、残りの日は社寺のおかげで商売（土産物店・物産店）が好調にできていると考えたい。それほどまでに日光の社寺の集客力は大きい。

●日光に生まれ育ったからには、祭りには参加して当然という意識があり、「世話人無くして祭りはできない」という自負と誇りもある。

●「年に一度の祭りと、それに関連する酒宴を心から楽しんでいる人」も少なからず存在する。

否定的な受け止め　〔時間の負担、金銭の負担、資金繰り〕

●まずは自分たちの町内で、千人行列に参加する供奉員（グブイン）の人集めが一苦労である。暗黙のルールとして高校生以上の男性が対象とされているため、女性だけで構成された家などは協力が難しい。また、世話人らは祭りの当日に世話人としての役割があるため、自分たちが千人行列に参加することもできない。

●各行事や祭りのたびに町内での寄付集めを世話人が担当する。二社一寺でそれぞれに行事も有り、特に 2 月 3 日の「節分会」などは 3 つの社寺で同日に行ったりもするので時間はかかる。自らも寄付をしないわけにいかないという実情はある。

●新年の祈願にむけた幣束（ヘイソク）[15]の注文を各家から受け付けるのも世話人の役割。年末は、本来の業務も忙しいので苦労はある。

●二荒山神社の「弥生祭」では家体に関するものを中心に費用がかかり、当番町の年で 350 万円～700 万円、当番町以外の年でも 150 万円程度を町の予算で賄うことになっている。これは世話人としても自治会長としても毎回悩みの種である。実際には自治会費の積み

[15]　多くは白の和紙、時には金、銀、五色の紙を細工し竹や木の幣串にはさんだもので、神霊が憑依する神体としたり、神前に供えたり、罪・穢れをはらう祓いの用具としたりする。御幣（ごへい）、オンヌサ、ミテグラ、オンベとも呼ばれる。（『日本民族大辞典』吉川弘文館より）

立てと、寄付金で工面している。
●提灯の新規製作など、使用目的を絞った形であれば、行政に補助金を申請し、数十万円支給してもらえることもあるが、申請手続きがややこしくて面倒でもある。

回答は肯定的なものと否定的なものと双方の要素が混在するが、総合的にみて、決して負担は軽くないものの、現在の世話人らも子どものころから、自分の祖父や父、伯父・叔父らが世話人を担当している姿が身近にあったため、「これは誰にでもできる役割ではない」として誇りに感じている様子がうかがえた。また、世話人が着る揃いの羽織もハレの日に相応しく凛々しい雰囲気を持っている。一方で、地域住民と近い立場であるがゆえに、人口減少や信仰心のゆるやかな低下などの時代の変化を最も近くで実感してもいた。供奉員や寄付なども、訪問先で父親の代までは協力的だったが、息子の代になってから、あまり協力してもらえなくなったといったエピソードも聞かれた。

「自治会費」を祭りの資金の一部として活用しているという回答を受けて、自治会費についても調査を行った（表 4)。弥生祭で家体の繰り出しを行う松原町では 1 世帯あたり月額 1300 円であり、この額は栃木県内の他の地区と比較しても高いことが分かる。なお、そもそも自治会に加入していないと祭りの誘いが来ないため主体的に参加することも難しくなる。

3. 社寺別の奉仕組織

日光東照宮、日光二荒山神社、日光山輪王寺を主とする「日光の社寺」では、先に述べた世話人のように共通する役回りだけでなく、社寺それぞれの祭りに特化した奉仕集団が存在している。

日光二荒山神社では 3 月の弥生祭を運行するために「若衆制度（ワカイシセイド)」の存在がある。50 歳代以上の男性で構成される世話人とは異なり、20 代～40 代の地域の若者が中心であるが、世代が近くなることで、小中高校時代の先輩、後輩、同級生であったり、

表 4. 自治会費の比較

自治会名称	松原町	所野	東小来川	平ケ崎	東峰竹
地域・特徴	日光市 日光エリア 市街地 家体繰り出し有り	日光市 日光エリア 市街地 家体・無	日光市 日光エリア 山村部 家体・無	日光市 今市エリア 住宅街	宇都宮市 栃木県内では都市部の住宅街
金額（月額） 〔年額〕	1,300 円 〔15,600 円〕	800 円 〔9,600 円〕	500 円 〔6,000 円〕	900 円 〔10,800 円〕	600 円 〔7,200 円〕

（注：2017 年 8 月に自治会費の金額について各町の住民に聞き取り調査を実施。）

地域の消防団に所属していたり、共に酒を飲む機会も多かったりと、非常に密なネットワークも持ちあわせている。対象地域は二荒山神社周辺の 15 町（西町 7 町・東町 8 町）で組織の規模は 50 名程度。担当する若者を若衆（ワカイシ）と呼称する。これは世話人と同様、現在まで男性のみが対象となっている地縁組織となる。また、若衆制度を経験した地域の男性らが所属する組織として「中老会」も存在する。中老と大老で構成され、70 歳以上の「大老」がトップであり、大老にあたる人物は複数いる。社会全体の高齢化とともに年ごとに「大老」の数も増加している。

かつて、日光地域の人口が多かった時は、若衆に入りたくても強いコネが無いと入れない、家業を継ぐ者のみで勤め人は対象外である、などと暗黙の規定もあったが、現在は地域に縁のある 20 代から 40 代の男性であれば歓迎され、先輩の若衆から「ぜひ入ってくれ」と依頼することも珍しくない。また、自治会に加入している住民が基本であったが、現在は、この点も必須条件とはされていない。若衆に加入する際に入会金などは無いが、安川町の場合は加入の際にお酒を 2 升持参すること、という規定があった。若衆はマチ単位の組織になるが、他のマチの若衆とも交流があり、楽しく酒を酌み交わすことも多いという。

東照宮例大祭の神輿の担ぎ手に特化して担当する団体として「神輿奉舁会（ミコシホウキョウカイ）」もある。これは 20 数年前に発足したもので、他の組織と比較しても非常に歴史的に新しい奉仕団体と位置付けられる。（第 3 章－1（1）で記す。）

日光東照宮の固有の特性として、徳川家の家系を継ぐ人々たちによる組織「徳川宗家」の存在もあり、産子会、奉舁会の役員らとともに、東照宮例大祭等の重要な神事に列席している。

さらに 800 年以上の歴史を持ちつつも、時代ごとの権力者に翻弄されてきた地縁組織の「神徳会（シントクカイ）」も存在する。組織の母体は平安時代末期の 1180 年ごろ、武士の流れを組む集団 330 名によって、日光二荒山神社と日光山輪王寺に奉仕する目的で作られた「宮仕（ミヤジ）」、「神人（ジニン）」の 2 つの組織とされている。1590 年（天正 18 年）に豊臣秀吉の小田原征伐があり、秀吉による日本統一がなされると、社寺の境内を除く、神橋から新里（現在の宇都宮市北部）までの日光神領が没収されることになった。宮仕、神人らは北条市の加勢として壬生城へ出兵していたこともあり、豊臣勢からの迫害を恐れ、300 名超は記録を破棄し各地へ逃れたが豊臣が亡くなり、徳川幕府が発足した後には、幕府が宮仕、神人の存在を認め、禄を与えるとしたため、60 名が日光に戻り、日光東照宮へ奉仕する組織として再編成された。なお、ここで二荒山神社と輪王寺は奉仕の対象から外れている。天海上人からの命で、家康死去後の 1617 年に久能山東照宮から日光東照宮へ神霊を移す際に、佐野領まで迎えにいく役目も与えられた。

日本の統治者が豊臣から徳川に代わるまでの空白期間が 10 数年あった影響で 200 名以上の宮仕、神人が不明となっているが、当時の直系の家であれば宮仕、神人として認められ、また長男に限らず、次男以降や養子でも対象となることから、その後の数は 75 名になるが、現在は 68 名である。宮仕と神人に優劣は無く、宮仕系は 10 名、神人系は 58 名。1973 年

写真 4.日光東照宮社務所庭園の宮仕・神人之碑（2017 年 12 月 17 日 筆者撮影）

（昭和 48 年）に宮仕と神人の組織を合わせたものとして「神徳会」となり、現在は 5 代目会長を沼尾貞一氏（84）が務めている。沼尾氏は、「神徳会の会員であることに直接的なメリットは無く、奉仕活動がメインであるものの、我々の祖先が、徳川から存在を認めてもらい、禄をもらえて、その後の 260 年間を平和に暮らせたのであるから、その恩へのご奉仕を今、しているだけですね。」と語る。先の大祭へも 10 万円の寄付金を納めているという。これまでの宮仕、神人の歴史を残そうと 1999 年に沼尾氏らで石碑「宮仕・神人之碑」（写真 4）を制作し、これは日光東照宮社務所の庭園に設置されている。

他の組織と同様、神徳会も高齢者が多く、また世話人とは異なり、家系で継いでいくことになるため、先代が亡くなってから後を継いでも、勝手がわからなくて困惑するということも多い。さらに告げるのが男性のみである、という申し合わせもあるために、その数も減少傾向にある。

以上のように、本章を通して社寺を支える組織が多岐にわたっていることが分かる。国宝を含めた歴史的建造物を守る組織もあれば、日光東照宮の「神輿奉舁会」や日光二荒山神社の「若衆制度」など、一つの祭を行うための組織もある。一方で、社寺と繋がりのある民間企業による支援組織も存在している。しかし、最も関わりが深く、定期的に会議などで顔を合わせているのが、各社寺の「世話人」と彼らの組織「世話人会」であるといえる。世話人の約半数が、各町の自治会長でもあるため、地域住民と社寺、双方の意思を把握して、仲介することができるようだ。現地での聞き取り調査で、世話人の実態を探ってみると、負担も多いが、奉仕することそのものが「恩返し」であり、「誇り」であり「喜び」であると回答があり、精神的な結びつきが非常に強いことが分かる。また、いずれの組織においても高齢化と人口減少が課題として認識されているため、新たに加入できる人材を探したりしているが、「地域との繋がり」を重視する部分が大きく、容易ではない。祭りをとりまく環境は 20 年後、30 年後にさらに深刻な状況になっていくと予測される。

第 3 章. 祭りの変化

1. 日光東照宮の例大祭における変化

「日光東照宮例大祭」については、日光東照宮の公式ホームページ[16]で以下のように記載されている。

毎年 5 月 17、18 日で開催。5 月 17 日には、午前 10 時より御本社に於いて徳川御宗家、産子会役員、来賓多数参列のもと「例祭」が行われます。その後、表参道特設馬場で「神事流鏑馬（シンジヤブサメ）」が奉納されます。夕刻には、神輿三基が二荒山神社に渡御、両社神職奉仕によって「宵成祭（ヨイナリサイ）」が行われます。

18 日には、午前 11 時より神輿渡御祭「百物揃千人武者行列（ヒャクモノゾロイセンニンムシャギョウレツ）」が行われ、神輿を中心に鎧武者など 53 種類 1,200 余名のご奉仕により御旅所（オタビショ）との間を往復します。御旅所では、「三品立七五膳（サンボンダテナナジュウゴゼン）」の特殊な神饌（シンセン）が供えられ、宮司祝詞（ノリト）奏上・八乙女神楽（ヤオトメカグラ）・東遊（アズマアソビ）が奉奏されます。神事終了後行列は東照宮にもどります。

（1）神輿奉舁会（ミコシホウキョウカイ）の発足

東照宮例大祭の神輿の担ぎ手を担当する団体として、**神輿奉舁会が** 20 数年前に発足した。発足の理由としては担ぎ手の不足であり、日光東照宮と東照宮と関りの深い企業・団体で話し合って組織された。例大祭では全部で 3 基ある神輿のうち 1 基または 2 基を担ぐ。会を構成しているのは 30 の企業・団体で、主に法人が多く、その法人も県内外さまざまであり、それぞれに一定数の人数割りあてがある。例大祭での重い神輿[17]を交代で担ぐため、1 基当たり 50 人から 55 人が必要で、2016 年の春季例大祭では、5 月 17 日の宵成祭で 1 基を担ぐために 57 人、5 月 18 日の渡御（千人行列を含む）で 2 基を担ぐために 110 人が参加した。足利銀行日光支店、栃木銀行日光支店では若手行員の研修を兼ねて参加する形もあり、業務の一環（上司からの命令形式）になっているケースもある。

祭の日時が決まっているため、年によっては平日にあたることも多いが、本業を休んだり、勤務シフトを調整したりして人材を確保している法人が多い。また、毎年の恒例行事として捉えられることもあり、事業所によっては自ら「今年も神輿を担ぎたい」と申し出てくる従業員も出てくるという。**神輿奉舁会に加入を希望する場合、企業・団体であれば特に制限は無いが、単年ではなく長年の継続が望ましいとされている。**現在は日光市で材木業を営む八木澤享一氏が 3 代目会長を務めている。

---

16 日光東照宮公式ホームページより「祭典年中行事～例大祭～」http://www.toshogu.jp/saiten/

17 日光東照宮の神輿の重量は初代のものが 1 基 1120kg で、1965 年（昭和 40 年）制作のもの（現在も使用）が 1 基約 800kg。

(2) 栗石返し[18]の日程変更

栃木県内でも、歴史ある那須烏山市の「山あげ祭り」や、鹿沼市の「鹿沼秋祭り（旧名 鹿沼ぶっつけ秋祭り）」は、前者が毎年 7 月第 4 週の金土日、後者が毎年 10 月の第 2 週の土日など、日程をフレキシブルに変更して展開している。これには祭りの担い手となる地域住民が参加しやすくなる点と、地域外からの人が見に来やすくなり、観光客も増加するという点、祭りを「見せる側」と「見る側」双方に現実的なメリットがある。

数年前に、日光の社寺でも「祭りを週末に移行することは可能か」という案が世話人会で議題になったが、「神様の生誕日をこちらの都合で勝手に変えるということが許されるものか」と、その日程の意味を再認識することになり、それ以降は議題にも上がっていない。

しかし、日程変更の分野で 1 つの大きな変化もあり、日光東照宮春季例大祭の準備のための神事「栗石返し」が、2010 年までは「毎年 5 月 3 日」と日付が固定されていたが、2011 年以降「ゴールデンウイーク前の日曜日」に変更された。変更の理由としては連休中に旅行などの別の予定を立てる人が増えたことや、参加する約 3000 人分の駐車場の確保をゴールデンウイークに重ねないことなどを考慮したためとされている。この点では参加者の都合や作業効率を重視した変化と言える。2016 年は 4 月 24 日（日）に、2017 年は 4 月 23 日（日）に行われた。

2. 日光二荒山神社の弥生祭における変化

「日光二荒山神社弥生祭」については、日光二荒山神社の公式ホームページ[19]で下記のように記載されている。

日光二荒山神社例祭である弥生祭は、古くは 3 月（弥生）に行われたとこらから「弥生祭」の名があります。神社祭典は 4 月 13 日から 17 日まで行われ、大祭当日の 17 日に付祭（つけまつり）として、東西 11 か町から花家体が繰り出されます。昭和 29 年、日光市制[20]を記念して観光協会の主催で 16 日に前夜祭が行われるようになりました。

弥生祭付祭は古きよき 1,200 有余年の伝統を残しながらも、時代の要請に合わせて幾つかの改革がなされ現在に至っています。

まず、尾島[21]（1980）によれば、この弥生祭そのものがすでに変化した後のものであることが分かっているが、本研究では、弥生祭の変化を探っていくため、弥生祭の前身につい

---

18 5 月の例大祭を前に日光東照宮で行われる日光独自の祭礼行事で、約 380 年にわたって続く境内清掃作業。境内に敷き詰められた栗石と呼ばれる玉石をひっくり返して石の下や隙間にたまったごみや杉の葉などを取り除く作業で、例年約 3 千人の市民が参加している。

19 日光二荒山神社公式ホームページより「弥生祭のみどころ」http://www.futarasan.jp/yayoi/

20 1954(昭和 29)年、日光町は 2 月 11 日、小来川村を編入し、市制を施行。

21 尾島利雄・監修，下野民俗研究会・編集 （1980）『栃木の祭りと芸能』月刊さつき研究社

ては、下記に記載するに留める。

四月十七日、春の遅い日光で、日光二荒山神社の例大祭である弥生祭の最後を飾る山車花屋台のくり込みが行われる。この祭礼の歴史は古く、古期によると奈良時代に始まったといわれる。その最初は神宮会（シングウエ）といって六月[22]に行っていたが、暑さが厳しいため 820 年（弘仁 11 年）より三月三日に行うこととなり、名称も三月会、弥生祭というようになったという。しかし、明治 5 年の改暦令により四月十七日となり、そのため現在四月に行っていても弥生祭という名称が残ることになったのである。(尾島,1980,pp26-27)

（1）儀式の簡略化

日光の弥生祭は別名「ゴタ祭り」と言われるほど、祭りの仕来たりを進めていく中で、各町内間でゴタゴタ問題が起こるものとされていた。本来は「ゴタゴタ」は祝い事と関連付けられ、ゴタゴタがあるほど、祭りを祝い喜ぶ表れとされていたが、1985 年（昭和 60 年）前後にゴタゴタによって家体の進行に支障が生じ、それが、観光客側からは長い待ち時間が必要となり、結果的に観光客の関心が薄れていくということが問題視された。そこで、各町内の代表者が 1 年がかりで話し合った結果、対策として祭礼の仕来たり（儀式）の簡略化が必要と結論付けられた。1988 年（昭和 63 年）の弥生祭より、執行事項の変更が行われている。当時、松原町の世話人を務めていた吉新[23]（1988）によれば、1988 年（昭和 63 年）3 月にまとめられた「六十三年弥生祭執行事項」において、祭りの進行に関する申し合わせに加えて、その他の欄で、それまで書かれることのなかった細かな注意点を挙げている。

（イ）弥生祭全般に亘り定められた時間を厳守すること。
（ロ）ゴタが発生した場合は祭儀部長が収拾すること。
（ハ）付祭執行については頭役一任するが、弥生祭終了後改正等の問題があれば協議すること。

（イ）により、これまで制御されなかったゴタが、参加者全員で時間を守る意識を共有でき、仮にゴタが収まらない場合も、（ロ）と（ハ）で収拾する役割が明確化された。また、一度二荒山神社の境内に集まった家体を、一台ずつ降ろしていく繰り下げの行程も、昭和 62 年までは、伝統に則り、当番町から隣の町へ、さらに隣の町がその隣の町へとリレー形式（写真 5）で伝えており、その際にも、決まった口上に些細な誤りがあっただけでゴタとなっていたが、前述の「執行事項」の報告事項の欄において、

---

22 旧暦 6 月は、新暦では 6 月下旬から 8 月上旬ごろに当たる。
23 吉新涼次（1988）『車輪付き花屋台の誕生』　月刊さつき研究社

写真 5. 若衆の使者口上（弥生祭付け祭での儀礼の一つ）
（2017 年 4 月 17 日 筆者撮影）

（ロ）の（1） 繰り下げの件については次の通りとする。
手打式終了後直ちに各町行事二名御物見前に参集し、東西両町別に当番町よりの使者の伝達を以って繰り下げをなすこと。

と定められた。これらの変更は効果が大きく、1988 年からは家体の繰り下げの時間が従来よりも約 2 時間早くなった。そのため、各町の家体も町内を十分に練り歩くことが可能となり、市民も含め観光客からも好評であった。仕来たりの改革は大きなニュースとなり、各新聞紙面でも大きく報道された。

「花家体」十分楽しめます～運行にたっぷり時間、儀式は簡略化～
江戸時代から続く日光市最大の市民の祭り「弥生祭付け祭り」のやり方が、今年から大幅に改められることになった。各町内の繰り出す「花家体」を二荒山神社へ奉納したあと、これまで約二時間半もかけていた儀式を三十分に短縮し、その分、花家体の連行に時間をかけようというもの。長い歴史の中で、初めての試みだ。伝統を重んじながらも、市民だれもが楽しめる時間を増やして、祭り気分をこれまで以上に盛り上げるのが狙い。儀式の簡略化は、三十年来の懸案だった、という。（朝日新聞,栃木版,1988 年（昭和 63 年）3 月 6 日日曜日）

(2)「家体[24]」の形体の変化

かつての各町の家体（以後、旧家体とする）は屈強な人夫がかつぐ神輿のようなもので、大きさは畳四畳半分、重さは 300 キロほどあった。そこに祭囃子を奏でる芸妓が 2、3 人乗

24 読みは「やたい」。祭に使用される山車の呼称。他の地域では「屋台」と表記されることが一般的だが、日光固有の表現で、神の分身を載せているという信仰に基づく。造花をあしらった花家体と細やかな彫刻で飾られた彫刻家体に区分される。現在は 11 町の家体すべてが花家体。

ったため、重さは 500 キロ前後になるものであった。そこに革命的な変革が起きたのが昭和 14 年、15 町の中で松原町が人担ぎ家体に車輪がつけられた。この年は、日中戦争が始まって 3 年目であり、全国的に食糧事情が悪化するとともに、若者が軍需工場に駆り出される「国民徴用令」も出されている。また、第 2 次世界大戦突入寸前でもあり、日光町からも若者は軍隊や軍需工場に送り込まれていった。こういった事情を踏まえ、弥生祭を滞りなく、しかも盛大に行うために家体に車輪が必要と考え、松原町の建設業、吉新涼次氏が車輪を取り付けた。当時の吉新氏は猛烈な反対も恐れていたというが、担ぎ手を頼める若者もいないうえ、重労働となる担ぎ手への雇用費がかさむこともあり、他の各町と、日光二荒山神社も一定の理解を示した。

「車輪付き屋台」を作成するにあたっても、戦時下で物資が不足する中で、しかも費用を少なくすることが課題であった。そこで、日光市で操業していた軍需工場の古川電工日光電気青銅所から銅線を巻き付ける太鼓の形状の「ドラム」を 4 つ譲りうけ、樫の木の心棒を取り付けて完成させた。初の車輪は音を軋ませながらも、弥生祭での急な坂道や階段も登りきった。また、松原町は、昭和 22 年には正式な車輪のある“正調家体”を作り、各町もそれにならって順次、車輪付き家体を作っていった。袋町では最後まで「人担ぎ家体」にこだわっていたが、時代の流れに勝てず、昭和 32 年には 15 町全てで車輪付き家体になった。

吉新（1988）によれば、昭和 14 年ごろまでの日光の町内事情は、先祖代々日光の住民で経済的に恵まれて表通りに住んでいる人の家を「本戸（ほんこ）」と呼び、裏通りの人とは区別されていた。各戸で「日差し（ひさし）」とよばれる貯金箱に貯金を行っており、この「日差し」の資金が弥生祭での家体の担ぎ手の雇用費に充てられていたが、日差しには本戸のみが参加できるものだった。裏通りの住民らは例え参加を希望しても入れてはもらえず、日光の伝統の祭りも“日光の一部住民の本戸のみで行われていた”状態であった。しかし、担ぎ手の雇用費負担が大きくなり、本戸だけでの負担が苦しくなった時期に登場した、車輪付き家体は裏通りの住民を含めた、全住民で祝えるという祭りの改革の一端にもなったという。

（3）付祭りでの「家体」の減少

二荒山神社の弥生祭を支えているのは、近隣の西町 7 町、東町 8 町の計 15 町で、それぞれに「花家体」を保持しているが、10 年以上前から西町 7 町のうち袋町、中本町、下本町の 3 町が家体を出しておらず、2013 年に東町 8 町の中で初めて中鉢石町が家体の繰り出しを中止した。家体の総数は 12 台から 11 台に減少した。中鉢石町は理由は「家体を動かせる人がいない、家体上でお囃子を演奏できる子どもがいない[25]ため、やむを得ず」としてい

[25] 中鉢石町自治会長、三ツ山氏の話では、中鉢石町内では、ここ数年「0 歳児から高校生までの年齢別人口がゼロ」のまま推移しているという。

る。また、祭りを中心的に担う“当番町（廻り番）”の順番が決まっているため、2017 年には中鉢石町が当番町になることも判明していたが、家体が出せないまま当番町を務めることはできず、他の町もそれぞれ当番町になる 3～4 年前から時間をかけて準備をしているため、次の当番町に迷惑をかけないためにも 2012 年を最終年とし、2013 年から家体繰り出しを中止する決断に至った。
ただし、手続き上は毎年、祭りの前に神社へ「休年届」を提出し、休んでいることになる。だが、再開の目途はまったく立たない状況である。中止の決定以降、中鉢石町の若集らは、祭りの際、隣町の家体や神輿かつぎを補佐する形で参加しているが、中鉢石町の世話人は“祭りの際に中鉢石町にも会所が設けられて、他の町の家体の休憩場所にもなる。そこで他の町の人と顔を合わせるたびに「今年も出ないのか」と言われ、肩身の狭い思いをしている”と話している。なお、過去には西町の袋町の家体が復活したことがあるが、やはり長くは続けられず、再び休年扱いとなっている。

人数が少ないという問題は中鉢石町に限ったことでは無く、他の町でも同様であり、他の地域に住む親戚縁者らに声をかけて参加してもらうことはもちろん、家体を動かすための人夫[26]を雇うことも珍しくない（写真 6）。人夫の賃金は各町の町内費で工面している。裃（かみしも）を着用して行事を行う人は、祭りについての知識が必要だが、筋力と持久力が求められる家体曳きなど、祭りについて詳しく知らない人でもサポートできる部分も

写真 6. 弥生祭での世話人と人夫ら（2017 年 4 月 17 日 筆者撮影）

[26] 「人夫（にんぷ）」力仕事に従事する労働者という意味。現在は差別用語、放送に相応しくない用語であるとして使用されなくなってきているが、これを「作業員」と置き換えてしまうとニュアンスが異なり、また対象地域では現在でも卑下する印象無しに「人夫」「人夫さん」という言葉が使用されているので、ここでは人夫という表現はそのまま使用する。なお、弥生祭では、町内の人たちとは異なる色と柄の法被を着ているので一目で判別できる。

写真 7. 家体曳きに参加する観光客ら（2017 年 4 月 17 日 筆者撮影）

存在している。

（4）「家体」曳きへの観客の参加

家体を二荒山神社の本殿前まで運ぶには、マチによって距離は異なるが 500ｍから 1500m ほどの上り坂を曳き上げることになる。本来は担当の町の人のみが家体を曳くものとされていたが、現在は見物客も参加が許容されている（写真 7）。各町の年長者が、周囲の観光客に「家体を曳かないか」と笑顔で声をかけるさまもよく見かける。町の人側の「人手不足」と、観光客側の「参加してみたい」という気持ちが合致したもので、その始まりがいつなのか、どの町の家体は最初だったのかは定かではないが、今後も続いていくものと考えられる。ただし、家体が上り坂を上りきった後、境内の社殿にお参りする「神明廻（シンメマワリ、またはシンメイマワリ）」は、地域のマチの人のみが対象となっており、縁の無い観光客は参加できない。

以上のように、祭りの変化から見えてくるものは多い。特に人口減少の影響が大きく、中鉢石町が弥生祭の家体繰り出しを休みだしたことは、祭の規模を縮小させている。神輿奉舁会の発足についても、以前はこのような組織が無くても神輿の担ぎ手が十分に集まっていたということの裏返しになる。興味深いのが長期にわたって 5 月 3 日で固定になっていた清掃行事「栗石返し」の日程変更である。これは、ゴールデンウイークを避けることで「参加する市民と、同時期に来る観光客のため」にメリットが明確化した変化であるととらえられる一方で、過去と比較して市民の生活での優先順位が変わり、社寺の一行事よりも個々人の都合を優先することが許容される傾向にあるともいえる。また同様に、市民らの職業についても時代とともに変化がおこっていると考えられる。日光地域の職人や土産物店経営などの自営業者であれば、自らの裁量で仕事を休みにしやすいが、会社勤めをするサラリーマンになれば、平日に休みを取得することも難しくなる。変化の背景に後者

の割合が増加している傾向が考えられる。いずれにしても、外部から変化を強いられるというものではなく、「人手が足りない」「生活スタイルが変わってきた」という奉仕団体内部の事情が、話し合いを経て、「祭りをより継続しやすい形式」に変化させてきていた。

第 4 章. 奉仕する市民たちについての調査

1. 供奉員（グブイン）についての調査

2016 年 5 月の日光東照宮の秋季例大祭において、百物揃千人武者行列に参加している人々について現地で聞き取り調査を行った。（表 5）

日光東照宮での春季例大祭では百物揃千人武者行列に約 1000 人、秋季例大祭では同じく武者行列に約 500 人が供奉員として参加している。草鞋で長時間歩くため、疲労は軽いものではないが、それぞれ参加後の満足感、達成感を感じていた。また、当日のキャンセルがほぼ出ない点も特徴であり、参加者が強い責任感を持って奉仕にあたっているということが分かる。割り当てのマチに在住している者でなくても参加することは可能であるが、そのマチの世話人や住民の紹介が必要となる。

今回の聞き取り調査の 28 人のうち 21 人が、市内の割当てのマチに在住で、1 人が実家がマチにあるため、祭りの日程に合わせて帰省をしていた。6 名は割当てのマチの知人から頼まれて参加。なお、参加することで、東照宮と担当町の自治会から合計で 7000 円から 9000 円程度の謝礼が支払われるため、アルバイト感覚で参加している高校生もいた。

【No.27】と【No.28】は、仕事で定年を迎える前は市外（神奈川県横浜市）在住だったが、定年後に日光に引っ越しをしてきてから供奉員に参加するようになったという 60 歳代の 2 人で、「祭りに参加したことで、初めて地域の一員になれたように感じる。」と回答した。また【No.22】は、日光市出身の 47 歳で、県外に就職したものの、毎年のように祭りに合わせて休暇を取って帰省し、供奉員に参加していると答えた。長年の習慣になっており、仕事や個人の予定よりも祭を優先しているようだ。今回が初参加の 28 歳、【No.25】に関しては、知人の紹介で参加しており、割り当てのマチの名を聞いても「分からないまま参加している」という答えだった。

「稚児」、「子供猿」を担当する子どもたちは地元の日光小学校と安良沢小学校の男子児童である。平日の場合は、小学校を休んで参加している。父親が鎧武者や御弓持を担当し、息子が子供猿を担当するといったように親子で共に参加するというケースもある。

2. 各町家体のお囃子についての調査

2017 年 4 月の弥生祭において、現行の 11 町（西町 4 町、東町 7 町）の家体を対象に、お囃子（写真 8）についての調査を行った。（表 6）

調査結果からは、石屋町のみが、町内でお囃子担当の子ども全員を揃えられており、これを除く 10 町で、他の地区在住の子どもたちの参加がある。板挽町においては、2017 年は当該町の住民は一人もいなかった。各町に住んでいる子どもの数が減っているは顕著である。お囃子も先述の千人武者行列と同様、広く一般に公募するものではなく、お囃子を支えるために町の人々が親戚縁者、知人に参加を呼びかけて集めていることが判明した。具体的には、当該町出身の女性で、他の地区に嫁いだ人の子どもや、町内の店舗の従業員

表 5. 百物揃千人武者行列供奉員の調査結果

〔職業・年齢・参加年数・割当て町名・割当て町に居住しているか〕

	担当役	普段の職業	性別	年齢	参加年数	町名	居住
1	御弓持	引退（東武鉄道 OB）	男	84	毎年	石屋町	○
2	御弓持	看護師	男	29	毎年	石屋町	×
3	兵士鉾持	高校生（日光明峰）	男	17	毎年	久次良町	○
4	鎧武者	高校生（日光明峰）	男	17	2	久次良町	×
5	兵士鉾持	会社員（宇都宮）	男	55	初	落合	○
6	兵士鉾持	会社員（今市）	男	20	初	落合	○
7	鎧武者	会社員（宇都宮）	男	40	毎年	安川町	×
8	鎧武者	会社員（宇都宮）	男	56	初	下鉢石町	×
9	掛面	引退・年金暮らし	男	82	初	下鉢石町	×
10	鎧武者	引退・年金暮らし	男	72	4～5	安良沢	○
11	鎧武者	引退・年金暮らし	男	73	4～5	安良沢	○
12	鎧武者	引退・年金暮らし	男	73	4～5	安良沢	○
13	鎧武者	引退・年金暮らし	男	71	4～5	安良沢	○
14	掛面	会社員（宇都宮）	男	48	ほぼ毎年	相生町	○
15	御本社神輿	会社員（県内）	男	42	ほぼ毎年	奉舁会	×
16	鎧武者	自営業（そば店）	男	73	毎年	大工町	○
17	御鉄砲持	引退・年金暮らし	男	74	6	稲荷町	○
18	鎧武者	アルバイト	男	66	毎年	若杉町	○
19	素袍着	引退・年金暮らし	男	78	毎年	若杉町	○
20	兵士鉾持	引退・年金暮らし	男	67	過去に有り	野口	○
21	兵士鉾持	引退・年金暮らし	男	65	初	瀬川	○
22	鎧武者	会社員（埼玉県） ※実家が日光市稲荷町	男	47	毎年	稲荷町	▲
23	御弓持	引退・年金暮らし	男	74	毎年	稲荷町	○
24	御弓持	会社員（宇都宮）	男	41	毎年	稲荷町	○
25	鎧武者	会社員（宇都宮）	男	28	初	（不明）	○
26	掛面	引退・年金暮らし	男	65	ほぼ毎年	花石町	○
27	掛面	引退・年金暮らし	男	64	初	花石町	○
28	掛面	引退・年金暮らし	男	63	3	花石町	○

（注：2016 年 5 月 18 日東照宮春季例大祭にて聞き取り調査を実施）

表 6. 家体ごとのお囃子の特徴

町名		お囃子隊の人数	当該町内在住の子	他の地区在住の子	特徴
西町	（4 町）お囃子は「清元」。楽器は大太鼓、付太鼓、鉦（かね）、笛				
	花石町 はないしちょう	全 15 名で構成。笛を除けば 8 名。	5 名	3 名	2017 年の当番町。
	板挽町 いたひきちょう	8 名で構成するも、当日 1 名欠席で 7 名。小学生と中学生。	0 名	7 名	うち、男子 3 名、女子 4 名。現在の住所区分は匠町で、匠町第一自治会の呼称として「板挽町」が残る。
	大工町 だいくちょう	全 14 名で、笛を除けば 9 名の小学生。	7 名	2 名	うち 1 名が男子。現在の住所区分は匠町で、匠町第二自治会の呼称として「板挽町」が残る。
	安川町 やすかわちょう	全 12 名で、笛を除けば 9 名の小、中学生。	7 名	2 名	
東町	（7 町）お囃子は「常磐津」。太鼓、鉦、笛に、三味線や鼓が加わる。				
	上鉢石町 かみはついしまち	全 13 名で、笛を除けば 8 名の小学生。	3 名	5 名	町内在住の 3 名は、移住してきた一家で、2017 年から参加。
	下鉢石町 しもはついしまち	小学生 15 名で構成。	6 名	9 名	2017 年に初めて男子が参加した。2 名。
	御幸町 ごこうまち	小学生 7 名で構成。	6 名	1 名	全員が女子。2017 年、見学ツアーにも協力。
	石屋町 いしやまち	小、中、高校生まで含め 8 名で構成。	8 名	0 名	男女混在。2017 年、見学ツアーにも協力。
	東和町 とうわちょう	小学生 7 名で構成。	4 名	3 名	
	松原町 まつばらちょう	小学生 12 名で構成。	10 名	2 名	うち男子が 3 名、女子が 9 名。2017 年、見学ツアーにも協力。
	稲荷町 いなりまち	全 18 名で、笛を除けば 15 名の小学生。	12 名	3 名	町自体が、商店街というより、裏町の住宅街。面積も最も広い。

（注：2017 年 4 月 17 日弥生祭にて聞き取り調査を実施）

写真 8. 安川町家体前のお囃子の子と若衆と世話人

（2017 年 4 月 17 日 筆者撮影）

の子どもが対象となっている。そういった「縁」が無ければ参加は難しいようだ。

聞き取り調査で、お囃子のルーツが、芸者であったことも判明した。60 年ほど前まで日光市下鉢石町に 3 軒の置屋があり、そこから各町内の自治会長らが容姿端麗な芸者を招き、祭りに華を添えていた。このことから、お囃子も女子が望ましいとされていたが、やはり子どもの数の減少もあり、希望があれば男子でも参加できるように変えた町も出てきた。下鉢石町では 2017 年に初めて男子が参加した。男子も女子も衣装は同じものであり、男子も女子と同じように顔には化粧をして参加する。

お囃子の練習は、各町内でばらつきはあるものの、3 月 20 日前後から 2 週間から 3 週間程度、週 5 日というスケジュールで集中的に行われている。普段は非公開であるが、2017 年は NPO 法人日光門前まちづくり主催による「弥生祭お囃子の練習見学ツアー」が 4 月 8 日と 4 月 12 日に開催され、松原町、石屋町、御幸町、稲荷町がそれぞれ公民館での練習の見学に協力した（写真 9）。初めての開催ではあったが、ツアーは両日とも定員の 15 名に達し、日光市内はもとより東京都や大阪府からも参加があった。複数の町のお囃子を見比べ、聞き比べることで、作法の違いや演奏曲の違いなども感じ取ることができ、「興味深かった」「弥生祭の見方が変わった」といった感想[27]も挙がっていた。

お囃子と地域の子どもたちについては、高橋（2012）[28]が、青森県蓬田村（よもぎたむら）でのねぶた祭りにおける、ねぶた囃子に参加した子どもたちを調査対象として研究している。ねぶた囃子の練習風景と祭りの準備風景、そして本番の様子を見てきたうえで、子供たちにとってのこのような場には、どのような意義を見出せるか、について次のように述べている。

27　NPO 法人日光門前まちづくり公式ブログ より「《日光ぶらり》弥生祭お囃子稽古の見学ツアーを開催しました！（2017 年 4 月 20 日）」http://blog.npo-nikko.jp/?p=1528

28　深作拓郎（代表編者）、高橋平徳、ほか（2012）『地域で遊ぶ、地域で育つ子どもたち～遊びから「子育ち支援」を考える』学文社

写真 9. 稲荷町お囃子の練習風景

（2017 年 4 月 12 日 NPO 法人日光門前まちづくり提供）

一年間、一生懸命練習し、本番で練習の成果を出し切り、村の人々に感謝され、みんなで一体感・達成感を感じることの人間形成における意義は、必ずしも小さいものではないはずです。さらに、他人に対する気持ちや、地域への愛着などの、言葉になりにくいさまざまなものが子どもたちに心の中に残るでしょう。その文化を、地域を受け継いでいこうという子どもも、ゆるやかに育っているはずです。（高橋,2012,p158）

地域の人々との関係のなかで、太鼓を叩いたり、笛を吹いたり、という祭りならではのわざを、自分でまねながら身につけることは楽しみのひとつにもなる。そして楽しさのなかにも、ところどころで緊張感を感じつつ、地域の人々、しかも両親や祖父母とも異なるいろいろな大人たちの様々なものの考え方に触れていくことができる。また、１年、２年と、わざを体得した年長者が、年少者に教えるようになるなどの経験は、地域における子育ての知恵でもあり、人間形成の力にも通じていく。

日光の弥生祭でも、青森県蓬田村のねぶた囃子同様の様子が見られ、お囃子に参加することを通して、祭りの歴史を知る世話人らとの交流、同世代の仲間たちとの交流が生まれていた。練習は夜がメインで、短期集中にもなるので体力面での負担はあるのだろうが、祭りで演奏した達成感と充実感から、翌年以降も積極的に参加する流れができている。また、お囃子に関連する着物などの衣装は各町から無料で貸し出され、髪結いのための支度金も 10,000 円程度支給されている。参加する子どもやその保護者の金銭負担がほぼ無いという点も地域が支えている特徴的な面と言える。

3. 日光における神事・祭事への女性の関わり方

現代社会では男女平等、男女同権が叫ばれていながらも、女性の立ち入りを禁止する聖域があったり、特定の神事には女性を参加させないという慣例がある。人々はこれを女人禁制と呼び、「性差別のクライマックス」と評する人もいる（岡野 1993[29]）。

事例としては、大相撲での土俵の立ち入りで、表彰式での賜杯授与を巡って議論になることが多くあった。また、2001 年（平成 13 年）7 月には京都の祇園祭で女性が山鉾に上がることが許されて 300 年ぶりに禁制が解かれたと話題になった。

日本における女人禁制とは、狭い意味では進行に関わる慣行で、女性に対して社寺や山岳の霊地や祭場への立ち入りを禁じ、女性の参拝や修行を拒否することであり、山の境界は「女人結界」と呼ばれた。比叡山や高野山などの山岳寺院を要する聖地は、一定の領地を女人禁制とし、特定の儀礼への参加を許さず、また、奈良の東大寺大仏殿や、薬師寺や法隆寺などの諸大寺の金堂も女性の立ち入りを認めなかった。神社の場合でも、女性が拝殿に上がることを禁じたり、男性のみの参加を維持する行事も数多い。現在では山岳のような広範囲な地域への女性の立ち入りを禁じる慣行は消滅しつつある。

山で熊や鹿を獲って暮らしていた東北地方のマタギは、狩猟で山に入るのは男性に限られていた。その理由は、山の女神は同性に嫉妬するし、月経を嫌って「山の幸」を授けなくなるからだといわれる。また、妻の妊娠中に猟に出るとケガをするという言い伝えもある。迷信とも取れる内容が多いが、漁業や狩猟など、男女分業が明確な場合は、仕事に関しての男女分業が明確な場合は、女神が嫉妬するという「同性反発」が多く語られる。これらは現在の女性の劣位の問題とは別の次元であるともいえる。

日本での女人禁制解除のルーツは 1872 年（明治 5 年）3 月 27 日の明治政府の「神社仏閣ノ地ニテ女人結界之場所有之候処、自今被廃止候条、登山参詣等可為勝手ノ事」という布告であり、同年 3 月 10 日に京都で開催を予定した博覧会に女性を含む多くの外国人の来賓を招くことになり、近郊の霊山への訪問が必至との判断に基づいた指令であった。この後で同年 9 月 15 日に、山を修業の場とする神仏混淆の修験道に対して廃止令が出されたことで、山の信仰に大きな変貌があり、各地の山で女人禁制が解かれた。

「女人禁制は伝統か差別か」については、2000 年（平成 12 年）と 2001 年（平成 13 年）に大相撲のシーンで、全国ニュースなどで注目を浴びた。具体的な事案として鈴木（2002）[30]は下記の 3 件を挙げている。

（1）2000 年（平成 12 年）2 月 8 日、当時の大阪府知事太田房江氏が初登庁の際に、大相撲春場所千秋楽（3 月 26 日）に、自ら土俵に上がって大阪府知事杯を優勝力士に渡したいとの意向を表明するも、2 月 29 日に時津風理事長と話し、見送りとなった。

（2）2001 年（平成 13 年）、おなじく太田房江府知事が、千秋楽で知事杯を渡したいと申

29　岡野治子（1993）『宗教のなかの女性史』　法蔵館

30　鈴木正崇（2002）『女人禁制』　吉川弘文館

し入れたが、許可は下りなかった。

2 件ともに理由は同じで、「大相撲は神事に基づき女性は土俵に上げないという伝統がある。その伝統を貫きたい」というものであった。また、遡ればさらに 10 年前にも同様の事例があった。

（3）1990 年（平成 2 年）当時の森山真弓・内閣官房長官が東京両国国技館での大相撲初場所千秋楽（1 月 21 日）に内閣総理大臣杯を代理として優勝力士に手渡す意向を示したが、1 月 5 日に協会から拒否の回答が来ている。当時の双子山理事長による理由は「伝統文化を守りたい」「土俵は神事であり、こうした社会がひとつくらいあってもよい」というものであった。（鈴木 2002）

現代、女人禁制はさまざまな批判にさらされてきている。それはこの用語自体が差別という様相を当初から含みこんだ印づけがなされた概念だからである。フェミニズムやジェンダーの研究者にとっては格好の餌食であり、人権運動を進める人々にとっては打破すべき目標である。また、伝統との関わりが議論の対象ともなるが、長い歴史の中で形成された伝統は変わらないものではない。微妙なかたちで変わり続けているのが伝統なのである。

女人禁制をめぐる禁忌の在り方や、祭祀や仏事との関連を考えることは、外来の思想が及ぶ中で、その読み替えがどのように行われ、地域社会で受容され、意味づけられ、伝統を創造し変化させていくかを検討することが大切であり、日本人の世界観や生き方の変遷を考えることにもなるといえそうである。

祭りと女性に関しては、松平[31]（1980）が祇園祭における「女たちの祭」をまとめており、女性への聞き取り調査から、祭りを「外の祭」と「内の祭」に区分している。祇園祭時期の女性たちは、祭りに向けて着物を縫う、来客のもてなしのための食事の用意、店番をするなど、「内の祭」に忙しくなっており、山車は一目見る程度となっている。また、子どもの時期には「手古舞（てこまい）[32]」として参加することがあるものの、12 歳くらいまでで「外の祭」への参加は無くなっていった。祇園祭に限らず、各地の大きな祭りにおける女性の参加の面では、やはり「内の祭」の担い手になる傾向が強いと思われる。

筆者も日光エリアでの祭りにおける女人禁制の実態を調査した。各社寺を対象に、付祭りに女人禁制が存在するのかを聞き取り調査したところ、二社一寺のいずれもが「明確な規定は無い」という回答であった。ただし、「一家の家長が代表して参加する」という習わ

31　松平誠（1980）『祭の社会学』講談社 pp.182-185

32　江戸の深川八幡祭に出た舞のことで、神輿や山車の先導役をつとめる。手古舞は梃前（梃を持って作業する仕事師）という語から出たという説、テコは『万葉集』の手児奈（女性のこと）から来たという説、手古は木遣りにあって、それをうたうところからついた、など諸説がある。芸奴が髪を男髷に結い、肩肌ぬぎにたっつけ袴・手甲・脚絆、足袋に草鞋履き、背に花笠を掛け、右手に扇を持って煽ぎ、木遣りが女性特有の甲高い声色で歌われ、合いの手に左手の鉄棒をジャランジャランと突き立てながら練り歩く。（『日本民族大辞典』吉川弘文館より）

しが習慣化して受け継がれているため、結果的に年長男性が参加をしている。また、食堂・レストラン・土産品販売・菓子販売など、観光客、参拝客を対象とした商売を営んでいる家も多いため、夫や父親が不在の時には、妻や娘が家業を切り盛りするという流れも根付いている。日光東照宮の例大祭では、千人行列に参加し、鎧武者などに扮した父や夫、息子の晴れ姿を写真に収めようとする母や妻らの姿も多く見られていた。日光の祭りでは、男女での棲み分け、作業分担が適度に作用していると考えられる。

日光二荒山神社の弥生祭における家体上のお囃子も、かつては芸者が担当し、そののちに各町の女児らが中心となっていたが、第 4 章 2 でも触れたとおり、現在は子どもの数の不足から男子もお囃子に参加できる町が増えてきているため、ここでも女人禁制、男子禁制の決まりは解消されてきている。現在、弥生祭を運営している若衆制度は男性のみの組織であるが、深刻な若者不足を背景に、近いうちに女性も参加できるように変えていくかもしれないと語る 60 歳代男性も祭の場にいた。

以上のように、祭に奉仕する市民たちの声を直接聞き取り調査したことで、いかに日光での暮らしと祭とが、精神面で深く繋がっているかが分かった。定年退職後に日光に移住してきた者でも自治会に加入することで、例大祭や弥生祭に参加することはできるが、特に日光地域で生まれ育った人は、子どものころに「子どもにしかできない役」で祭りに参加しており、また、祭に参加している自らの父や祖父の凛々しい姿を見て、大人になったら鎧を着たい、神輿を担ぎたいといった思いを持つようになる。まさに「祭りとともに生きていく」というライフスタイルがある。祭と女性のかかわりについては、日光では金棒引きなどの一部を除けば、中心が男性であるものの、市民の中に女性差別や女性蔑視というような印象は無かった。また、女性への聞き取りのなかで千人武者行列に参加したいという意思をもつ女性は一人もいなかった。男性の担当分野に女性が参加するということに興味を持っていないこと、言い換えれば「親々の代から祭りはこういうものだ」というイメージが強いことで、男女がそれぞれの立ち位置で祭に参加し、社寺に奉仕するという役割の分担が適度にできている。

第 5 章. 環境の変化

1. 日光市日光地域の変遷と現状

2006 年（平成 18 年）3 月 20 日今市市、(旧) 日光市、足尾町、藤原町、栗山村が新設合併し、現在の日光市が発足した。本論文中では混同を避けるため旧日光市に該当する地域を「日光地域」として扱う。(図 3)

図 3. 日光市と合併前の区域

（日光市ホームページより）

全国的な人口減少の流れは栃木県においても止まることはなく、日光地域の人口もここ 60 年は減少を続けている。国勢調査による日光地域の人口を比較してみると、日光地域の 2015 年の人口 13,370 人が比較可能なデータとして最古の 1920 年（大正 9 年）の 19,575 人を 6,000 人以上、下回っていることが分かり、現在がこれまでに経験したことのない人口減少社会になっていることが分かる。また、人口のピークは 1955 年（昭和 30 年）の 33,490 人で、2000 年にかけて落ち込み、それ以降もゆるやかに減少の一途をたどっている（図 4)。日光地域内でも地域差はあるが、ピーク時と比較

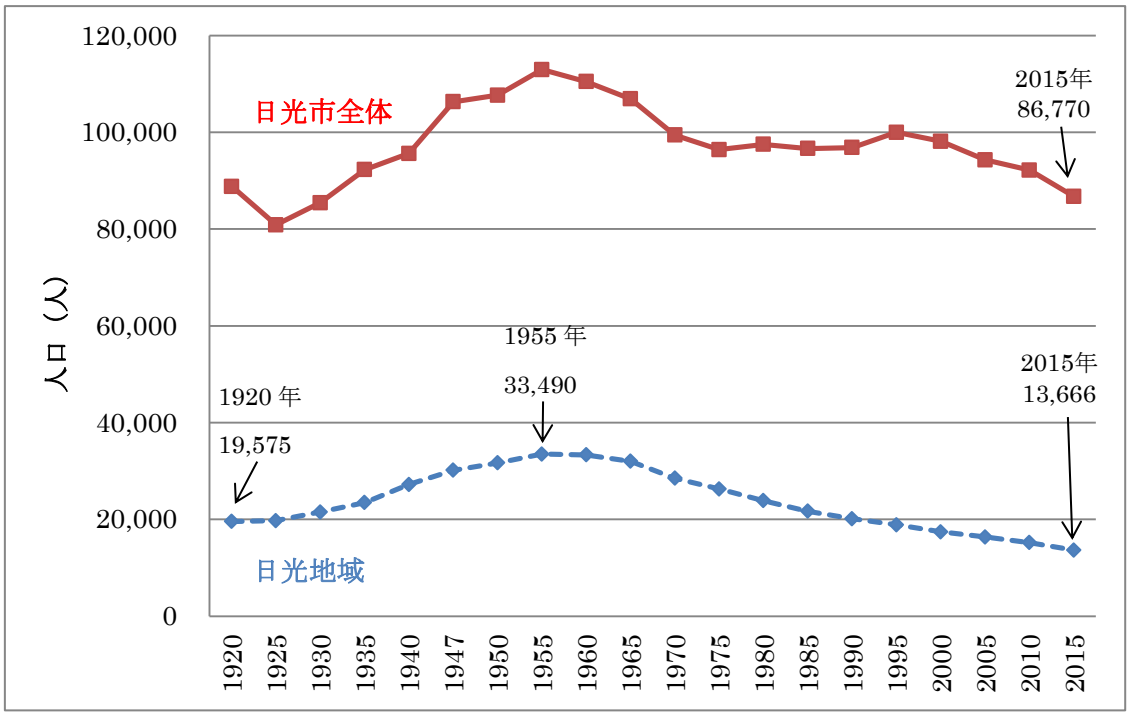

図 4. 日光市全体と日光地域の人口推移

〔注：国勢調査より。日光市全体の合併前のデータは旧市町村のデータから筆者作成〕

表 7. 年齢構成別地区別状況比較表

地域名	総数 比率	15 歳未満	15~64 歳	65 歳以上 (A)	(A)のうち 75 歳以上	(A)のうち 85 歳以上
日光地域	16,379 100%	1,857 11.3%	9,642 58.9%	4,880 29.8%	2,478 15.1%	650 4.0%
日光市	94,291 100%	12,243 13.0%	58,784 62.3%	23,200 24.6%	11,139 11.8%	2,690 2.9%
栃木県	100%	14.1%	66.3%	19.4%	9.1%	2.2%
全国	100%	13.7%	65.8%	20.1%	9.1%	2.3%

（注：平成 17 年国勢調査より）

し、現在の人口は約 2.5 分の 1 にあたる。祭りの主体が住民であることを考えると、ひとりあたりの負担は単純計算で 2.5 倍となり、さらに 65 歳以上の高齢人口が全国平均よりも多く、高齢化率[33]が高いこと（表 7）から、2.5 倍の数値以上の負担増があると考えられる。

2. 平成 18 年の市町村合併が与えた影響

「平成の大合併」は 1999 年（平成 11 年）から政府主導で行われた市町村合併であり、自治体を広域化することによって行財政基盤を強化し、地方分権の推進に対応することなどを目的とした。 2005 年（平成 17 年）前後に最も多く合併が行われ、市町村合併特例新法が期限切れとなる 2010 年（平成 22 年）3 月末に終了。この期間の合併で全国の市町村数は 3300 から 1700 にほぼ半減している。

これにはアメとムチの両面があった。国が地方交付税の縮減のために、「合併特例債」「地方交付税の合併算定替え」というアメと、「2005 年３月までに合併しなければ、合併特例法が期限切れになる」というムチである。特に「合併特例債」は市町村が新たに借金をする場合に、その 7 割を国が負担するという破格の条件であり、全国各地で老朽化したゴミ処理場や斎場などの建替えに当てられるケースも目立った。

日光市像を探ると、実際に合併前の旧日光市でも、市への地方交付税額が 2002 年度（平成 14 年度）22.2 億円だったものが 2003 年度（平成 15 年度）は 19.7 億円と、たった 1 年で 11%も削減されてきており、財政はひっ迫し、その後の不安も指摘されていた。自治体が生き残る道は合併しかないという機運も高まり、旧日光市の進むべき合併の形式にあたっては、住民の意思が問われ、2003 年 12 月に住民投票が行われた。結果は下記のとおりである。

[33] 65 歳以上の高齢者人口（老年人口）が総人口に占める割合を高齢化率（こうれいかりつ）という。高齢化率によって高齢化率 7%～14%を「高齢化社会」、14%～21%を「高齢社会」、21%以上を「超高齢社会」と分類される。日本の少子高齢化の原因は、出生数が減る一方で、平均寿命が延びて高齢者が増えているためである。

「日光市の市町村合併に関しての意思を問う住民投票」
◇当日投票資格者数：14,560 人
◇投票者数：10,218 人　　◇投票率：70.17%

・日光市・今市市・足尾町・藤原町・栗山村での合併	6,590 票（64.5%）
・日光市・足尾町での合併	291 票（ 2.8%）
・日光市単独	3,237 票（31.7%）
・無効	100 票（ 1.0%）

〔第 23 回日光地区合併協議会資料（平成 17 年 2 月 7 日）より〕

単独で存続させたいという意見も 3 割強あったものの、人口が多い今市市を含めた 2 市 2 町 1 村の連携が課題の解決に現実的であるとして、5 市町村合併が多数派とされた。

5 市町村での合併については、まず今市市が中心となって動いた。2001 年 12 月に「日光地区合併研究会」を設置、「合併特集号」を発行し、旧日光市、藤原町、足尾町、栗山村へ合併の提案を持っていき、1999 年に 4 町が合併して誕生していた兵庫県篠山市（ささやまし）[34]の合併をモデルとして、各市町村で講演会を実施。地域の商工会にも協力を要請し、講演会にも市民の積極的な参加を呼び掛けた。2003 年 2 月 17 日　日光市・今市市・足尾町・栗山村・藤原町任意合併協議会が設置されるが、栗山村の村議会で合併協設置議案が否決され、同年 9 月に旧日光市も 5 市町村の合併案から脱退。旧日光市が抜けることで、足尾町が飛び地扱い[35]になるが、その形式もやむを得ないとして、4 市町村で 2005 年 3 月末の合併に向けて準備が進行した。2005 年 1 月、旧日光市で住民からの直接請求として「日光市の合併に関する住民の意思を問う住民投票条例」制定の請求が市長に提出され、議会で条例が可決される。この住民投票は同年 2 月 27 日に行われるが、2016 年の「18 歳選挙権」に先駆けて、対象が 18 歳以上の男女となっていた点も特徴的である。「合併に賛成 73.9%」、「反対 26.1%」という住民投票の結果を受けて、2005 年 3 月 2 日に合併関連議案を旧日光市が可決。5 市町村（2 市 2 町 1 村）での合併が決定し、2006 年（平成 18 年）3 月 20 日、「日光市」として新市が新設された。合併には「新設合併（いわゆる対等合併）」と「編入合併」の 2 種類があるが、日光市は名前を残した形での「新設合併」となり、市役所は旧今市市役所に置かれた。

「市町村の合併の特例に関する法律」（旧・合併特例法）における財政優遇策の適用を受けるには 2005 年 3 月までに合併を申請し、2006 年 3 月までに合併する必要があったため、二転三転した上で、なんとか期限内に事態を収拾しようとした姿がうかがえる。

---

[34] 1996 年に合併研究会が発足し、1997 年に合併協議会が結成。1999 年 4 月 1 日に旧多紀郡篠山町・今田町・丹南町・西紀町の 4 町が合併し市制が施行された。篠山市の誕生に際し、「自治体合併による人口 4 万以上の市制」を全国で初適用、平成の大合併のさきがけとなった。

[35] 足尾町は栃木県の西端の町でもあり、東に鹿沼市、北に旧日光市、旧日光市の東に今市市という位置関係になる。

表 8. 5 市町村合併のあゆみ

5市町村合併のあゆみ	
H14・12	今市市民が今市市長に対し、5市町村合併の法定協議会の設置請求を提出
H15・2	「日光市・今市市・足尾町・栗山村・藤原町任意合併協議会」を設置
	今市市民の住民発議による5市町村合併の法定協議会設置議案を議会に提案するが、栗山村議会で否決される。
6	「日光市・今市市・足尾町・栗山村・藤原町任意合併協議会」を解散
7	「日光地区合併推進協議会」を設置
9	日光市が5市町村合併からの離脱を表明
	「日光地区合併推進協議会」を解散
10	「今市市・足尾町・藤原町・栗山村合併協議会」を設置
	合併の方式を新設合併、合併の期日を平成17年3月31日、新市の事務所の位置を現今市市役所、現在の足尾町、藤原町及び栗山村役場を総合支所とする。
	「広域的なまちづくりに関する住民意識調査」を実施
11	日光市が「合併についての意思を問う住民投票」を実施し、日光広域圏の合併に賛成が65%を占める。
12	日光市が合併協議会に加入し、協議会の名称を「日光地区合併協議会」に改める。
	合併の期日を平成17年6月末日に変更
H16・5	合併の期日を平成18年3月20日に変更
6～10	「議会議員の定数及び任期の取扱い」の協議
7～8	5市町村で合併住民説明会を開催
11	新市建設計画の承認
	合併協定書調印式
12	5市町村で合併関連議案を提案するが、日光市議会で否決される。
	日光市が「合併に関する住民投票」を実施し、日光広域圏の合併に賛成が73%を占める。
H17・2	日光市議会で合併関連議案を可決
3	栃木県知事に合併申請書を提出
	総務大臣による合併の告示
7	
H18・3・20	新「日光市」誕生

〔注：出典 協議会だより 11 号（最終号）[36]（2006）〕

任意合併協の協議に約 2 年半を費やし、その間、旧日光市が 2 度も合併協議を離脱、賛否を問う住民投票も 2 回実施されるなど、なかなか合併への足並みが揃わなかった理由は、人口が約 4 倍で、合併後人口の約 65%を占め、財政力も大きい旧今市市に「吸収合併」される印象が強く、そこへの不満、反発が大勢であった。

その不満や反発が、内側に向けて作用することもある。佐藤による「年報村落社会研究 49 検証・平成の大合併と農山村」（2013）[37]では、平成の合併が地方自治体に大きな打撃になった一方で、合併した旧町村における「コミュニティの制度化」や「旧町村単位のアイデンティティが露出・再強化していく可能性」があると指摘している。これは「自治の覚醒」、「住民自治の実現への出発点」としてもとらえられる。しかし、その作用が長期間にわたって継続するかどうかは、地域性によると考えられる。日光地域（旧日光市）の市民の中では、合併後の祭りの際に、「改めて、今市に飲み込まれることなく、日光地域の自分たちで日光の祭を支え、盛り上げていくんだ」という意識の高まりがあったという。

また、旧日光市では、合併前まで、日光東照宮産子会の会長と日光二荒山神社氏子会の会長は市長の“あて職”とされていたが、合併後にその仕組みは継続されず、旧日光市で最後の市長を務めていた真杉瑞夫氏が現在も 2 つの会長職に就いている。真杉氏が退いた後、誰がその任を担っていくかは現時点では未定となっている。

祭に関連する事項としては、合併前は日光地域の小学校は、児童たちが祭りに参加することを推奨し、大きな祭りの日は全ての小学校が臨時休校になっていたが、合併後は休校にはならず、参加児童の通う学校の校長あてに、各町の自治会長から欠席願いの届け出を

36 日光地区合併協議会事務局 （2006 年 3 月）『協議会だより 11 号』p.3

37 佐藤康行・編（2013）『年報村落社会研究 49 検証・平成の大合併と農山村』日本村落研究学会企画

出す形式に変化している。社寺の祭事をメインで支える 15 町では、以前のように届け出も無しで児童たちが参加できる方が良かったという声が未だに聞こえてくる。祭りは日付が固定されているため、平日の開催となる年は、千人行列に男児たちが参加するとなっても、かつてはその日に出番の無い女児たちが見物に来られたが、現在の参加児童のみの欠席という形式であれば、女児たちが友人や兄弟、また父や祖父の晴れ姿を見ることもかなわない。

本章で見てきたように、年々、人口減少が進み、高齢化率も高まる日光地域（旧日光市）は、2006 年（平成 18 年）に今市市、藤原町、足尾町、栗山村の 4 つの自治体と合併し、新日光市となった。この合併そのものも、日光地域での住民の足並みがそろわず、約 3 年半の期間を要しているが、その根底に「日光の社寺と、その祭りを自分たちが支えてきた」という強いプライド、誇りがあったためである。ただし、止まることがない人口減少が非常に深刻な問題であることも、市民、行政の双方が認識できている。人口減少のストップ、住民人口の増加を目的とした移住促進や子育て支援施策も行政が進めつつあるが、就労や福祉の点について他の地方自治体とよりも優位であるとは言えず、苦戦している。

合併によって 2005 年時点での自治体の人口は旧日光市の 16,379 人から新日光市の 94,291 人へと 5.7 倍に増えてはいるが、「神事・祭事を支える主体が二社一寺の周辺住民である」という部分が変化していないため、精神的な要素のみが大きく、この合併が神事・祭事の存続に対し、プラスにもマイナスにも多大な影響を及ぼしているとは考えにくい。むしろ行政側は神事・祭事を観光資源ととらえつつも、積極的に介入できるものではないとしていた。また、新日光市には、今市地域や藤原地域、栗山地域などでも長年続く祭りがあるため、日光地域だけを特別扱いして資金援助するなどということも難しいのだろう。

聞き取り調査の結果、日光地域の住民の中から「合併前の方がやりやすかった」という意見も出ていたが、それらに関しては、積極的に行政が取り組めば、今からでも予算面での支援や学校の休日の仕組みなど、一部の制度変更で、再度調整できる余地もあると思われる。それぞれの地域の特性に応じてカスタマイズすることで、地域住民の「積極的なボランティア」が活性化されうるだろう。さらに、他の地域と人材や寄付金を補い合えて祭の主体も増やせるよう、仲介するための機会や場の提供も行政でサポートできるかもしれない。

おわりに—日光の祭りから日本の祭りの将来を見る—

本研究では、第 1 章で筆者が実際に例大祭の千人武者行列に参加した経験から、日光東照宮の春季例大祭の概要を紹介しつつ、研究の目的をまとめた。柳田國男から始まった民俗学研究では、祭りは特別な「ハレ」であり、神に近づき、散在して喜びを分かち合うとされたが、現代では「日常のハレ化」と「祭りのイベント化」が起きている。本来、氏子たちのための祭りが、誰のためのものになるのかという観点も生まれ、現在の祭りのとらえ方が多面的になっている。また、地縁組織と社縁組織では、年ごとの景気に左右されにくい地縁組織の方が、より強固で安定的な支持基盤を作りえると言えたが、地縁と社縁がバランスよくあればより安定する。日光の社寺についてはこの理想形に近いと考えられる。

第 2 章で社寺を支える組織について研究すると、二社一寺の支持組織がそれぞれ多岐にわたっていることが分かる。国宝を含めた歴史的建造物を守る組織もあれば、日光東照宮の「神輿奉舁会」や日光二荒山神社の「若衆制度」など、一つの祭を行うための組織もある。一方で、社寺と繋がりのある民間企業による支援組織も存在している。しかし、最も関わりが深く、定期的に会議などで顔を合わせているのが、各社寺の「世話人」と彼らの組織「世話人会」であった。世話人の約半数が、各町の自治会長でもあるため、地域住民と社寺、双方の意思を把握して、仲介することができるようだ。現地での聞き取り調査で、世話人の実態を探ってみると、負担も多いが、奉仕することそのものが「恩返し」であり、「誇り」であり「喜び」であると回答があり、住民と祭りとの精神的な結びつきが非常に強いことが分かった。

第 3 章の「祭りの変化」から見えてくるものは多い。特に人口減少の影響が大きく、2013 年から中鉢石町が弥生祭の家体繰り出しを休みだしたことは、祭の規模そのものを縮小させてもいる。神輿奉舁会についても、以前はこの組織が無くても神輿の担ぎ手が十分に集まっていたということの裏返しになる。興味深いのが長期にわたって 5 月 3 日で固定になっていた清掃行事「栗石返し」の日程変更である。これは、ゴールデンウイークを避けることで「参加する市民と、同時期に来る観光客のため」にメリットが明確化した変化であるととらえられる一方で、過去と比較して市民の生活での優先順位が変わり、社寺の一行事よりも個々人の都合を優先することが許容される傾向にあるともいえる。また同様に、市民らの職業についても時代とともに変化がおこっていると考えられる。日光地域の職人や土産物店経営などの自営業者であれば、自らの裁量で仕事を休みにしやすいが、会社勤めをするサラリーマンになれば、平日に休みを取得することも難しくなる。変化の背景に後者の割合が増加している傾向が考えられる。いずれにしても、外部から変化を強いられるというものではなく、「人手が足りない」「生活スタイルが変わってきた」という奉仕団体内部の事情が、話し合いを経て、「祭りをより継続しやすい形式」に変化させてきていた。

第 4 章では祭に奉仕する市民たちの声を直接聞き取り調査したことで、いかに日光での暮らしと祭とが、精神面で深く繋がっているかが分かった。定年退職後に日光に移住して

きた者でも自治会に加入することで、例大祭や弥生祭に参加することはできるが、特に日光地域で生まれ育った人は、子どものころに「子どもにしかできない役」で祭りに参加しており、また、祭に参加している自らの父や祖父の凛々しい姿を見て、大人になったら鎧を着たい、神輿を担ぎたいといった思いを持つようになる。まさに「祭りとともに生きていく」というライフスタイルが日光地域にある。祭と女性のかかわりについては、日光の祭りの中では、中心が男性ではあるものの、市民の中に女性差別や女性蔑視というような印象は無かった。男女それぞれの立ち位置で祭に参加しており、適度に役割の分担ができている。

第 5 章では人口のデータなどをもとに、日光市と日光地域の現状をまとめた。年々、人口減少が進み、高齢化率も高まる日光地域（旧日光市）は、2006 年（平成 18 年）に今市市、藤原町、足尾町、栗山村の 4 つの自治体と合併し、新日光市となった。この合併そのものも、日光地域での住民の足並みがそろわず、約 3 年半の期間を要しているが、その根底に「日光の社寺と、その祭りを自分たちが支えてきた」という強いプライドもあったようである。ただし、止まることがない人口減少が非常に深刻な問題であることも、市民、行政の双方が認識できている。人口減少のストップ、住民人口の増加を目的とした移住促進や子育て支援施策も行政が進めつつあるが、就労や福祉の点について他の地方自治体とよりも優位であるとは言えず、苦戦している。合併後に、住民のなかで出てきた「合併前の方がやりやすかった」という意見にも注目したい。この点に関しては、今からでも予算面での支援や学校の休日の仕組みなど、行政側の制度変更で、再度調整できる余地もあると思われる。日光市には、今市地域や、藤原地域、栗山地域などでも歴史ある祭りがあるため、日光地域だけを特別扱いするというのは難しいであろうが、それぞれの地域の特性に応じてカスタマイズすることで、地域住民の「積極的なボランティア」が活性化されうるだろう。

日光地域に生まれた者は、子どものころから弥生祭でのお囃子や、例大祭での稚児行列、子供猿などに参加しており、祭に参加するのが当たり前という環境で育ってきている。お囃子の太鼓や鉦はおおむね小学 4 年生以上が対象だが、それ以下の子供や幼児たちは金棒引きという、着物姿で錫杖を持つ先導役での参加ができる。金棒引き（写真 10）から、お囃子（写真 11）へ、そして難度の高い笛の担当へと一連の流れがそれぞれのマチにある。

弥生祭に向けて、2 週間から 3 週間、各町の公民館で集中的に練習をすることによって、古くから町に住む指導役の住民や、一緒にお囃子に取り組む子どもたちともコミュニケーションが深まる。お囃子の練習だけでなく、一緒に食事をしたりもするので、祭り以降で街頭で会った時も挨拶をしたり、会話をしたりすることに繋がってくる。さらに、父や祖父が世話人や供奉員などを務める背中を見ており、成人した後も当然のように社寺に奉仕をする文化がある。

また、日光の社寺で神仏に仕える人々も、地元の日光地域に生まれ育った者が多く、小学校や中学校の同窓生や先輩後輩の関係だったりもしているため、社寺の職員の間や、職

写真 10. 弥生祭での花石町の金棒引き
（2017 年 4 月 17 日 筆者撮影）

写真 11. 弥生祭での安川町家体のお囃子
（2017 年 4 月 17 日 筆者撮影）

員と世話人の間に古くからの友人、知人であるという関係もある。これらの「人と人の精神的な結びつき」や「コミュニティの形成と強化」が、グローバルには「社寺と人の結びつき」を構成しており、長年、社寺を支える力となってきている。

それらの精神的な結びつきそのものを「因襲」や「伝統」として言葉にする市民もいたが、岡本[38]（1973）は違いを明確にしている。

因襲と伝統は違う。伝統はわれわれの生活の中に、仕事の中に生きてくるものでなければならない。現在の生き甲斐から過去を友好的に捉え、価値として再評価する。そのときに、現在の問題として浮かび上がってくるのです。古いものは常に新しい時代に見かえさえれることによって、つまり、否定的肯定によって価値づけられる。そして伝統になる。‥‥「伝統」「伝統」と鬼の首でも取ったような気になっているこの言葉自体、トラディッションの翻訳として明治後半に作られた新造語にすぎません。しかも伝統主義者たちは権威的にいろいろ挙げてはいるが、しかしそれらが新しい日本の血肉に決定的な爪あとを立ててはいないのです。‥‥まったく、日本には伝統そのものがないんじゃないかと疑いたくなる。（岡本,1973,pp.224-225）

長年、受け継がれてきた精神を次の世代が受け継いでいく上で様々な変化は必然である。日光においても、その祭りの精神は伝統として次の代へ継続されるものである一方で、祭りの主体がこうでなければならないという観念は因襲とも取れる。事実、第 3 章で述べてきたように日光東照宮の例大祭でも、日光二荒山神社の弥生祭でも変化は起こってきてい

38　岡本太郎（1973）『日本の伝統』講談社

る。その主体について、米山（1974）[39]は、「1973 年の祇園祭の調査から導いた興味深い事実」として次のようにまとめている。

立場や見方の違う多様な参加者が、それぞれ、この祭を自分のこととして考えているという点である。自分たちが出なければ、この祭は動かない―――という考えを、この祭にかかわるほとんどの人がもっている。はっきりそういう人もあれば、つつしみぶかく“仕方なしにやっています”という人もある。しかしいずれにせよ、自分がやらなければ、という誇りがみんなにある。‥‥これはいわば、自発的、主体的な参加意識、とでもいうべきものだろう。積極的なボランティアの精神である。それが、多様な参加者をつなぎ、祭を実現させるのである。（米山,1974,pp.191-192）

調査を通して、日光の住民からも同様「積極的なボランティア精神」を感じ受けた。祭りは「自分たちのこと」であり、「自分たちの喜び」が非常に大きい。また、それは大きな遊びであり、重要な役割を持つものほど「生きがい」としてもとらえている。彼らの喜びと共にある「特別なハレ」が、何万人もの観客をより魅了することにつながっている。喜びを感じあえる主体に新たに加わる人がいれば、その後、長期間にわたって祭りの支え手になってもらえる。祭りを現在と同じ程度の規模で継続しようとしたら、日光の社寺のお膝元の 15 町だけでなく、もっと広い範囲のマチで支えるという形式もあるだろう。1,200 年以上に渡って社寺を支え、祭りを支えてきたという日光地域の市民の誇りと自負心も大きい上に、親々の代と同じものを後世に伝えようという意識から、変化が好まれない傾向も強いが、弥生祭における車輪付き家体など、「大きな変化」の実例もある。変化したものでも、それが根付いてしまえば、新しい伝統になりうることが証明されている。変化の余地は無数にあり、翌年に何かが変わっていてもおかしくはない。具体的には、これまで日光地域〔1.3 万人〕が主に社寺を支える役割を担っていたが、近い将来に、合併によって拡大した日光市全体〔8.1 万人〕、上都賀地区[40]〔17.8 万人〕、栃木県全体〔196 万人〕で支える形に変化していく可能性も考えられる。

また、歴史ある祭りだけでなく新しい社寺との関わり方が提示された例もあった。日光山輪王寺の境内で、2016 年 8 月に「世界遺産フェスティバル」というイベントが開催された（写真 12,13）。これはマルシェ（青空市）の場所として境内の使用を初めて許可したものだった。ジェラートやスムージーなどの飲食物や、アクセサリー・雑貨の販売、また若手ミュージシャンのライブなど、お寺とは直接関係の薄いものも多数並んだが、これまでとは異なった形で地域住民に場所を開放し、布教活動のきっかけに繋げようという意図であった。時代に合わせた寺社の姿勢の変化の一つとしてとらえられる。

---

[39] 米山俊直（1974）『祇園祭　都市人類学ことはじめ』中央公論社

[40] 上都賀地区は、かつて栃木県西部にあった「上都賀郡」の名を遺す地域区分で現在の鹿沼市と日光市を合わせた地域。JA などの協同組合や教育行政区分、スポーツ大会の区分として使われている。

写真 12. 輪王寺での世界遺産フェスティバル 1
（2016 年 8 月 10 日 筆者撮影）

写真 13. 輪王寺での世界遺産フェスティバル 2
（2016 年 8 月 10 日 筆者撮影）

祭りの調査の中でも、中心で活動している世話人や若衆の複数の人から、「伝統的に決まっていることは変えられないが、変えられる部分は、町内で相談して変えていく」という声が聞かれた。おそらく祭りの日程を週末に合わせて年ごとに変えることが不可能だと思われるが、例えば、女性の参加は起こりえるかもしれない。現在まで世話人や若衆制度の中に女性は一人も入っていないが、意欲ある女性の加入は、大きな力になる。重い神輿を担ぐのには不向きかもしれないが、それ以外の役割も無数にある。弥生祭の家体上のお囃子が、ここ 20 年の間で男子も受け入れるようになったので、その逆があってもおかしくはないだろう。

期待したい変化を挙げるなら、合併によって大祭の日の臨時休校がなくなった市立小学校の制度である。特別な日に特別な着物を纏い、誇らしい気持ちで「特別なハレ」を享受する機会を確保し、かつ子どもたちが、男女の隔たりなく日光地域だけの「特別なハレ」を楽しめる環境設計こそが、より地域への愛着を深いものにし、さらにしっかりと次の世代への伝承につなげていくことができる。

聞き取り調査のなかで、ある世話人から「千人武者行列に地元の高校生をまとめてボランティア参加させたらどうかと考えたことがある」という意見が出てきた。これは非常に面白い考え方である。日光市内には現在、日光明峰高校、今市高校、今市工業高校の 3 つの公立高等学校があり、順に 200 名、600 名、460 名、計 1260 名ほどの生徒がいる。千人武者行列が男子生徒のみの参加となるため約半数になるが、先述の小学校のように高校も休みになれば 200～300 名の供奉員は容易に確保できるうえ、日光地域ではない今市地域や藤原地域に生まれ育った生徒も多いため、これをきっかけとして将来大人になっても祭に参加する、その入り口として設定できる。将来祭りの主体に加わりたい者がいれば、それぞれのマチと繋がったり、神輿奉舁会のような支援組織に加入したりしても良い。また、高校の教員が生徒らを統率しやすい環境にもあるため、世話人と高校の教員が連携できれば、事前のレクチャーも容易になるうえ、祭り本番の全体の統率も取りやすくなる。高校生側も「祭りの喜び」と「地域文化の学習」という成果を得られる。男子生徒のみで問題が生じるのであれば、女子生徒は着物の着付けのサポートなど祭りの裏方仕事を体験し、

学んでも良いのではないだろうか。

一方で、祭りに関しては「参加したい人が参加できる仕組みに変えていく」という考え方もある。毎年４月に山梨県笛吹市で開催されている「川中島合戦戦国絵巻[41]」という武田信玄と上杉謙信が雌雄を決した「川中島の戦い」を再現した戦国合戦イベントでは、ふるさと納税の納税者を対象として、武田信玄（30 万円）、上杉謙信（10 万円）、一般兵（5000 円）などが参加できる仕組みを取っている。日光東照宮の例大祭における奉納行事「百物揃千人武者行列」は、春季例大祭に 1000 人以上、秋季例大祭に 700 人以上の規模で展開しつつ、毎回、世話人が供奉員集めに苦労している現状が続くのであれば、笛吹市をモデルとして千人行列の一部を「参加したい人」に門戸を広げる案もあるだろう。各町での資金難に対応できれば一石二鳥となる。

もちろん、「川中島戦国絵巻」は最初から、見て楽しむ「イベント」としてスタートしているため、日光の社寺の「祭り」とは基盤も精神性も異なっている。そして、主体が変わることには様々な課題も伴う。お金さえ出せば誰でも参加できてよいのかという議論や、ブランド価値が低下するのではないか、サブカルチャー的なコスプレイベントと同義にされるのでは、という危惧も出てくるだろう。ただし、これは事前にしっかりと参加者にレクチャーできる機会を設けておけば、質を落とさずに継続できるチャンスでもある。それまで「地元だから」という理由だけで祭りに参加できていた者にとっては、知識面でも精神面でも、新参者に負けるわけにいかないと、威儀を正すきっかけになるかもしれない。

別の課題としては、これまで世話人らが、それぞれのマチからの参加者をある程度コントロールできていた部分において、新たな参加者の面倒を誰が見るのか定める必要も出てくるだろう。それでも近い将来、千人行列に千人の供奉員が揃わない時期がやってきたときに、新しく門戸を広げて人材を確保するか、それとも 800 人、600 人と、規模を小さくしながら可能な範囲で次世代へバトンを渡すか、どちらかの選択が迫られることになる。

本論文では日光市の社寺文化を中心として、神事・祭事の研究を進めてきた。これは一つのモデルにすぎないかもしれないが、日本の祭り全体に通じる部分もあるだろう。日本全体を見れば各地に社寺があり、またそこに祭りがある。そして神事・祭事に関連した「付け祭」こそが、地域住民が一致団結するハレの場であり、わざわざそれを見にきた観光客にも、非日常を感じさせてくれる。祭りの中心にいる者は、大人も子どもも、祭りのために何か月も前から準備をし、寄付金を出し、労働での奉仕もするという「体験の共有」が人と人とのコミュニケーションを密にし、絆を深めることに繋がっている。地域で生きる喜びと誇りが、親から子へ、子から孫へと受け継がれているさまは魅力的であり、そこに「地域のチカラ」を実感できる。「やらなければならない」という使命感もあり、祭りが無い地域と比べれば多少の経済的負担もあるのだろうが、生まれた土地や、住んでいる土地に大きな祭りがあるということは、それだけで喜びも１つ多くなり、幸せなことなのだ。

41　笛吹市公式の観光ポータルサイトふえふき観光ナビより「川中島合戦戦国絵巻」
http://fuefuki-kanko.jp/content/kawanakajima/

日光地域で出会った「祭りに関わる人びと」は、聞き取り調査に対し、誰もが「自分たちの祭り」について楽しそうに話してくれて、それぞれから強い郷土愛が感じられた。

現在、小さな祭りは、淘汰されてしまう時代でもある。ハレの日の喜びよりもはるかに負担が大きくなってしまえば仕方ないのかもしれない。親々の代と同じように実施したい気持ちがあっても、子や孫に、自分と同じような苦労をかけたくないと思えば、毎年行っていた祭りも､2 年に一度､3 年に一度と無理のない範囲で行えるように頻度が下げられる。祭りを行わなくても、神輿や祭具の維持には費用が掛かることもあり、やがて全てが過去のものになってしまう。そして、一度止めた祭りを再興し、何年何十年と継続していくのは容易なことではない。

今後、同規模で祭りを継続していくために、行政ができることは、多くは無いかもしれない。事実、聞き取り調査の中で「祭りに関して、行政に期待したいこと」を聞いても、「特に無い」という回答が大半であった。祭りを支える人たちの分母を増やす取り組みとしては人口増、移住促進などの行政施策だが、就労や福祉、環境条件などで、現在の日光市に大きな期待はできそうもない。できる部分で考えれば、補助金の交付、祭り当日の交通規制・交通整理など、資金面と環境整備面のバックアップが現実的である。補助金については、ある世話人から、申請手続きが非常に面倒であったという声が聞かれた。際限なく援助できるものでは無いが、手続きの簡略化は行政側で歩み寄れる範疇ではないか。加えて、小学生から高校生までの児童・生徒が祭りに参加しやすい施策はあっても良いだろう。

今後の祭りの継続のために、地域の市民が具体的にできることは､「自分たちだけでやる」と閉鎖的な精神にならないことである。第 4 章-2 で「弥生祭お囃子練習の見学ツアー」に触れたが、このような祭りの背景を開示し、準備期間も含めて共有できる取り組みこそが、他の地域で生まれ育った者にも祭りの本質をより深く理解させることができ、また、お囃子を担当するマチの住民にとっては「自分たちが受け継いできたもの」の価値の大きさを再認識することに繋がる。

日光地域に移住してくる人は多くはないが、その彼らを寛容に受け入れ、徐々に日光地域のカラーに染まってもらう姿勢が望ましい。「昔から自分たちだけで支えてきた」という自負は、往々にして排他的になり、祭りの主体をさらに先細りさせかねない。共に祭りの内側から「ハレの喜び」を享受できる、そんな仲間づくりがしやすい環境を各地域で意識するべきだろう。また、これまで女性を入れてこなかった部分にも女性が入れるような仕組みも生まれてくるかもしれない。長い歴史を持つ祭になるほど、急な変革を好まない傾向は強いであろうが、第 3 章で見てきたように、祭りは時代とともに変化を許容している部分もある。神事や祭事の日程も、日光の社寺では変えられるものではないと返答されているが、神事のみを既定の日程で行い、付け祭りを週末に開催するといった分離開催案なども検討されてくるかもしれない。

第 1 章で触れた小松（1997）の「祭りのイベント化」で提示された「誰のための祭りなのか」という定義の再検討には、社寺、地域住民、地域産業、観光客、カメラマン、それ

らすべてのためのものとしてあるのが望ましい。祭りの歴史的な背景を尊重し、祭りの内側からも外側からも、その祭りの意味についても深く理解できる人材を育てる、そして日光以外の地域で生まれた者も、希望すれば参加できるよう精神的な垣根を低くしていくことが、多くの人々に愛される祭りを盛大に継続していくために必要なこととなるだろう。

今回の研究の聞き取り調査で会った世話人のほとんどが、同じように日光の祭りの「現在」をとらえながら、「将来像」を真剣に模索していた。

参考文献・参考ウェブサイト

牧田茂（1972）『神と祭りと日本人』講談社
岡本太郎(1973)『日本の伝統』講談社
米山俊直（1974）『祇園祭～都市人類学ことはじめ』中央公論社
米山俊直（1979）『天神祭～大阪の祭礼』中央公論社
尾島利雄・監修，下野民俗研究会・編（1980）『栃木の祭りと芸能』月刊さつき研究社
松平誠（1980）『祭りの社会学』講談社現代新書
鳥越皓之編（1989）『民俗学を学ぶ人のために』世界思想社
吉新涼次（1988）『車輪付き花屋台の誕生』月刊さつき研究社
柳田國男（1978）『新柳田國男集　第五巻』筑摩文庫
福田アジオ（1992）『柳田国男の民俗学』　吉川弘文館
川田順造「なぜわれわれは『伝承』を問題にするのか」(『日本民俗学』193 号,1993）日本民俗学会
岡野治子(1993)　『宗教のなか女性史』法蔵館
小松和彦、阿南透ほか（1997）『現代の世相５　祭とイベント』　小学館
国立歴史民俗博物館編（1999）『歴博大学院セミナー　民俗学の資料論』　吉川弘文館
真野俊和（2001）『日本の祭りを読み解く』吉川弘文館
鈴木正崇（2002）『女人禁制』　吉川弘文館
『協議会 だより 11 号』(2006 年 3 月）日光地区合併協議会事務局 p.3
東野朱音（2016）『神楽とまつり―西米良での生活から―』　宇都宮大学国際学部卒業論文
王暁蕾（2017）『地方都市の近隣自治組織をめぐる日中比較研究―宇都宮市自治会 と済南居民委員―』　宇都宮大学国際学部国際社会学修士論文
『栃木県観光客入込数・宿泊数推定調査結果』平成 15 年版、18 年版、22 年版、28 年版　栃木県商工労働観光部観光交流課
『日本民族大辞典』(1999）福田アジオ ほか・編　吉川弘文館
『わくわく日光の社寺たんけん』日光文化財愛護少年団育成会　平成 12 年度発行
朝日新聞,栃木版,1988 年（昭和 63 年）3 月 6 日日曜日

日光市 < https://www.city.nikko.lg.jp/ >
日光東照宮 < http://www.toshogu.jp/ >
日光二荒山神社 < http://www.futarasan.jp/ >
公益財団法人 日光社寺文化財保存会 < http://www.nikko-bunkazai.or.jp/ >
山梨県笛吹市公式の観光ポータルサイトふえふき観光ナビ
< http://fuefuki-kanko.jp/content/kawanakajima/ >
NPO 法人日光門前まちづくり公式ブログ < http://blog.npo-nikko.jp/?p=1528 >

付属資料：日光の社寺に関連するできごと

西暦／元号	全国的な動向	日光の動向
766 年／天平神護（てんぴょうじんご）2 年		勝道上人が二荒山（ふたらさん）を開く根拠地として四本竜寺（しほんりゅうじ）を建てる。輪王寺の起こりであり、日光開山とされる。
767 年／神護景雲元年		弥生祭が初めて行われたとされている。
820 年／弘仁 11 年		円仁が三仏堂を建てた。
1180 年ごろ	（平安時代末期）	宮仕、神人の組織が誕生し、日光山に奉仕をはじめる。
1200 年ごろ	（鎌倉時代初期）	鎌倉将軍家の日光山に対する信仰が強かった。
1338 年／暦応元年	足利尊氏が京都に幕府を開く。南朝と北朝の対立が続く。	日光山は南朝方に付いた。
1590 年／天正 18 年	豊臣秀吉が全国統一	秀吉の小田原攻めの際に、日光山が北条方に味方したため、所領を没収され、日光山は荒れ果てた。
1634 年／寛永 11 年		日光東照宮の造営開始
1636 年／寛永 13 年		徳川家光による東照宮の大造営が完了。日光東照宮完成となる。
1652 年／承応元年		八王子千人同心が「日光火の番」に命じられる。
1689 年／元禄 2 年		松尾芭蕉が日光を訪れる。
1775 年／安永 4 年		この年より弥生祭の付祭りが始まったとされる。
1868 年／明治元年	新政府が発足。神仏分離令が発布される。	戊辰戦争時、日光にも戦火が迫った。
1872 年／明治 5 年		奥日光の女人禁制がとかれる。
1874 年／明治 7 年		外国人の旅行規制がなくなる。
1879 年／明治 12 年		「日光の社寺」を保護するための「保晃会」（ほこうかい）が当時の町民や幕臣等によって組織され、社寺の修理等を開始
1894 年／明治 27 年	日清戦争 開戦。	
1897 年／明治 30 年	政府が「古社寺保存法」を制定。	日光でも社寺の修理を担当する専任の技師が置かれる。
1904 年／明治 37 年	日露戦争 開戦。	
1912 年／明治 45 年・大正元年	明治天皇崩御、大正天皇践祚。	

1914 年／大正 3 年	オーストリア、セルビアに宣戦布告。第一次世界大戦勃発。大隈内閣、日英同盟を理由に対独宣戦布告。	
1926 年／大正 15 年・昭和元年	大正天皇崩御。摂政裕仁親王、践祚して昭和と改元。	
1929 年／昭和 4 年	政府が「国宝保存法」を制定。	
1939 年／昭和 14 年		弥生祭において松原町が初めて「人担ぎ家体」に車輪を取り付けて参加。資金難の一面もあり、この時期から表通りの住民（本戸）だけでなく、裏通りの住民も祭の資金に拠出ができるようになった。
1941 年／昭和 16 年	太平洋戦争 勃発。	
1945 年／昭和 20 年	終戦。	
1950 年／昭和 25 年	政府が「文化財保護法」を制定。	
1957 年／昭和 32 年	神武景気からナベ底へ景気が悪化。	弥生祭において、袋町が車輪付き家体を導入し、15 町すべてが、車輪付き家体になる。（松原町から車輪付きが始まった 18 年後）
1964 年／昭和 39 年	東京オリンピック開催（第 18 回夏季オリンピック）	
1973 年／昭和 48 年		宮仕、神人をまとめた「神徳会」が発足。
1980 年／昭和 55 年		この頃から弥生祭の家体のお囃子が、女子のみでなく、男子も加入する町が出てくる。
1982 年／昭和 57 年		日光二荒山神社で男体山鎮座 1200 年大祭。栃木県で開催の全国植林祭とあわせて天皇皇后両陛下がご参拝。二荒山神社に「山門」と「楼門」を建立。弥生祭において安川町が新調家体を建造。家体を収納する蔵も建設され、それまでの「祭りの後は解体して収納」という保管方法が「そのままでの保管」に変化。
1988 年／昭和 63 年		弥生祭における儀式の簡略化が決定。

1995 年ごろ		神輿奉舁会の発足
1999 年／平成 8 年		「日光の社寺」がユネスコ世界文化遺産に認定。
2006 年／平成 18 年		合併により新日光市誕生
2013 年／平成 25 年		弥生祭で中鉢石町が家体の繰り出しが無くなる（手続き上は休み扱い）。
2015 年／平成 27 年		日光東照宮 400 年式年大祭
2016 年／平成 28 年		日光開山 1250 年として二荒山神社と輪王寺で記念行事を行う。
2017 年／平成 29 年		日光東照宮の国宝、陽明門約 40 年ぶりの修理を終え 4 年ぶりに一般公開を再開。

あとがき

いつから言われるようになったか定かではないが、「日光見ずして結構と言うなかれ」という格言がある。「にっこう」と「けっこう」の掛け詞(ことば)で、あの美しい日光東照宮こそ結構という言葉に価するもので、それを見ないうちは結構という言葉を遣うな、と東照宮の壮麗さを賞賛したものである。ヨーロッパでは「ナポリを見てから死ね」という格言もあるようだが、日本国内の他の歴史的建造物がこのような扱われ方はしていない。それだけ、近代の日本全土をまとめあげ、260 年以上の平和な時代を作ったとされる江戸幕府、初代将軍徳川家康公が祀られている日光東照宮は、日本において特別な場所の一つととらえられている。その東照宮を含めた世界文化遺産「日光の社寺」は、連日、国内外から多数の観光客、参拝客が訪れているが、とりわけ、大祭の日には道路も渋滞し、祭りのメイン会場も人であふれる。

筆者は現在、日光市に在住している文字通り「日光市民」であるが、2006 年の 5 市町村合併前までは、本籍が旧今市市にあったため、「日光市民」では無かった。観光客という立場では複数回、日光の社寺の祭りを見に行ったことはあったが、祭りの主体として「内側」から参加したことは無かったのだ。「割と近くの他人」とでも表現しようか、「なんとなく祭りのことを知っていても、仲間には入れてもらえない」「祭りの概要を把握していて、簡単に説明はできても全部は知らない」という状況であった。

合併による「新日光市」誕生の先駆けとして、合併 6 年前の 2012 年 2 月に今市地区と日光地区の青年会議所が一本化し「一般社団法人　日光青年会議所」が発足した。この時期に仕事の繋がりで青年会議所のメンバーと交流が生まれ、旧日光市エリア（日光地区）の方々とも一気に交流の輪が広がった。そして、その出会いのひとつが、2012 年の百物揃千人武者行列への参加に繋がった。「割と近くの他人」が、「とても近い親戚」に変化した感もあった。そこで鎧武者となって内側の視点から見えた、喜びと危機感。そして長い間、外側の視点から見てきた観光資源という視点。この 2 つの視点で祭りをとらえると、深く掘り下げることができ、非常に面白そうだと感じたのだった。

今回の研究を通して、日光地域の人々に感じられたのは「日光地域で生きること」という一つの芯が通った流れであった。子どもが祭りで着る着物も、かつて祖父が着て、父が着て、叔父が着ていたものを受けついでいたり、千人武者行列での父の晴れ姿を見て、いずれ自分も千人行列に加わりたいとか、大神輿をかつぎたいと将来のビジョンを持つようになる。女性の目線からも、お囃子や笛で参加するとともに、夫や息子の晴れ姿に目を細めているようだ。日光での祭りは、地域住民にとって、まさしく「特別なハレ」であり、他の用事を差し置いても可能な限り優先する行事としてしっかりと根付いていた。

ずっと外側から見ていただけでは分からないことも多く、平成の大合併時に混乱したことも記憶に新しいかったため、祭りの中心となっている日光地域の方々が一種排他的な姿勢を強く持っているかもしれないと予感していた。その部分が全く無い訳ではないのであ

ろうが、一歩、主体の中に入れば「今年も良い祭りを作ろう」と同じ目的に向かって進む同志が多く、非常に楽しい時間を多くの方々と共有することができた。

本研究で見てきたように、祭りを取り巻く環境はどんどん変化し、支え手である市民らも、より「支えやすい形」に変化をしていく。これは進化でもなく、退化でもない「変化」である。いま、本論文を書き上げ、これからも近い場所から、祭りという地域文化の変化を見守りつつ、参加できる時には内側から日光の誇らしい伝統を支えていきたいと心から思っている。

最後に、学部生の時は自然科学の研究をしていたため、社会科学研究のジャンルには不得手であった私に、丁寧に御指導、御助言をいただいた中村祐司先生、古村学先生、阪本公美子先生、ともに学んだ大学院 2 年次生のみなさん、学部生 4 年のみなさん、忙しい中でも丁寧に取材にご協力いただいた日光東照宮様、日光二荒山神社様、日光山輪王寺様、各町の世話人の方々、支援団体代表の方々、大学院での研究を応援してくれた職場のみなさん、そして様々な面で支えてくれた妻、両親、3 人の子どもたちに深く感謝の意を表したい。